

復興に向けての 今後の取組み

第1章において、国の復興施策を中心に述べたが、復興は、地元の熱意、発意に基づいて地元自治体が復興計画の策定や実施を行い、国はそれを支援するという役割分担のもとで、それぞれの力を最大限に生かし、両者の施策が相まって、推進されていかなければならない。

復興計画の策定や実施、新たなまちづくりや経済の復興は、地元地方公共団体が住民の意向を尊重し、地元の熱意をくみ取りつつ行われるものであり、県や市町の役割は非常に大きいものがある。

一方、国の役割は、地元地方公共団体の復興計画の実施に当たり、復興が円滑に進むよう積極的に必要な措置を講じることである。

第1 被災地の復興計画

1 兵庫県

この復興計画の策定に当たっては、まず「都市再生戦略策定懇話会」から平成7年3月に提言を受けた「阪神・淡路震災復興戦略ビジョン」に基づき、「阪神・淡路震災復興計画—基本構想—」を策定した。

さらに、「ひょうごフェニックス県民フォーラム」をはじめとする被災者からの提言や県民アンケート、各分野にわたる復興県民会議、学術団体、市民団体、県民等からの提案をもとに、「阪神・淡路震災復興計画策定委員会」から、具体的な復興事業を検討・立案した「阪神・淡路震災復興計画」の提言がなされた。

これを受け、県の総合計画「兵庫2001年計画」のフォローアップ作業における検討内容を踏まえ、

被災各市町の復興計画との調整を図りつつ、300万人を超える被災地域の住民の1日も早い生活の安定と被災地の速やかな復旧・復興を目指して、この復興計画を策定した。

(1) 基本方針

i 被災者のなかには、精神的、物質的に大きな被害を受け、将来にかけた人生の夢や展望が持てない人、目の前の現象しか考える余裕がなくなっている人が少なくない。

これらの人々が自力復興への意欲と活力を持ち、新しい生活を切り開くためには、どれほどの誘導と支援が可能となるかが復興の鍵を握っており、本計画は、これらの直面する課題に対し、きめ細かい様々な政策的努力を重ねることを前提とする。

ii 今回の地震による被害を、これまでの「利便」「効率」「成長」を重視する都市文明への大きな警告と受け取め、被災地の責任として、「安全」



2005年、創造的復興が完成する

「安心」「ゆとり」をキーワードとする都市を復興しなければならない。

国の理解を得ながら、大災害の現場から得られた教訓を生かし、従来の考え方を超えた都市基盤の整備とそれを活用したコミュニティ形成のモデル地域を目指すこととする。

iii 復興に当たって重要なことは、単に1月17日以前の状態を回復するだけでなく、新たな視点から都市を再生する「創造的復興」を成し遂げることである。そのため、「兵庫2001年計画」の総合的点検において示された「21世紀初頭の新たな兵庫の創造についての基本的な考え方」と「被災地域の長期ビジョン」の上に立って、関西国際空港開港、大阪湾ベイエリア整備、明石海峡大橋建設等により世界都市関西の形成が期待されるなか、阪神・淡路の文化的特性を生か

し、新しい都市文明の形成を目指すこととする。

(2) 目標年次

震災による被害の規模とその及ぼした影響から、復興の目標年次は、2005年（平成17年）とする。

(3) 対象地域

この計画の対象地域は、兵庫県内の災害救助法対象地域である下記の「10市10町」とする。

神戸市、尼崎市、明石市、西宮市、洲本市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、三木市、川西市、津名町、淡路町、北淡町、一宮町、五色町、東浦町、緑町、西淡町、三原町、南淡町

復興事業の内容については、これら被災市町を越えた地域も含む。

(4) 復興事業計画

ア 21世紀に対応した福祉のまちづくり

被災した住宅の復興に合わせ、高齢者や障害者をはじめとするすべての人々が、安心して暮らせるコミュニティの形成をめざし、「健やか長寿大作戦」に基づき、社会福祉施設などの整備を進めるほか、地域活動やボランティア活動のネットワーク化などを通じて、共に生きるノーマライゼーションの理念を基調とし、保健・医療・福祉機能が連携した生きがいの持てる地域づくりを進める。

(ア) バリアフリーのまちづくりの推進

高齢者や障害者、外国人県民等のすべての人達が快適に生活できる都市空間及び居住空間の整備を進めるとともに、ケアサービスの向上を図り、人にやさしいまちづくりを行う。

- 保健・医療・福祉サービスと一体となった住宅地整備——神戸東部新都心——

- 高齢者・障害者に配慮したまちづくりの推進

(イ) 良質な復興住宅の供給

被災者が早期に安定した住生活を営めるよう、まちづくりと一体となった良質な住宅・宅地の供

給を進めるとともに、住宅再建・確保に際しての様々なニーズに対応する各種支援制度及び相談窓口を設置する。

- 災害復興（賃貸）住宅の供給促進
- 民間住宅復興に向けての基礎的な支援
- 民間住宅の再建支援
- 被災地の再生と連携した新都市核等での良質な住宅・宅地供給
- 被災マンションの再建支援
- 地域の防災性を高める住まいづくり
- 福祉の心が息づく人にやさしい住まいづくり
- 住宅相談窓口の設置
- 輸入住宅の供給促進
- 被災県民への特別融資等

(ウ) 住民の安心とふれあいを支える拠点の整備
 地域の間人関係づくりを進めるため、各地域の特性に応じたサービスが提供できる拠点及び先駆的な意味を持つ広域拠点を整備するほか、これらの施設間の連携やソフト面での充実に努め、住民の安心とふれあいを支えていく。

- ボランティア活動の推進
- 高齢者等の援護と自立支援
- 保健・医療・福祉拠点づくり
- 地域安全対策の強化

(エ) 人的ネットワークシステムの整備

広域・地域拠点施設等を活用し、保健婦（士）、訪問看護婦（士）等を派遣し、サービスを提供するとともに、かかりつけ医の普及・定着を進め、ボランティア・福祉活動を通じた人的ネットワークづくりを進め、これを基盤とする総合的なケアマネジメントと人材育成・活用のシステムづくりを進める。

- 被災地域におけるネットワークづくりの推進
- 青少年活動の推進
- 県民運動実践活動のネットワーク化

(オ) 災害医療システムの整備

現行の救急医療システムをベースに、二次医療

圏毎に、災害医療情報の収集・提供、医療機関や搬送機関への指令、救命救急医療の提供、患者の搬送、医薬品等の備蓄等について総合的なシステムを整備するとともに、県域を対象とした災害医療の中核施設を創設する。また、今回の震災において、保険に加入できない外国人県民の未払い医療費の補填について対応を図る。

- 災害医療システムの整備
- 医療費補填

イ 世界に開かれた、文化豊かな社会づくり

阪神・淡路地域は、すぐれた生活環境のもと、海外文化を積極的に受け入れ、日本を代表する個性あふれる市民文化を形成してきた。今後、生涯学習のネットワーク化などを通じて文化豊かな、ゆとりとアメニティに富む国際性豊かなまちづくりを推進する。

(ア) 地域の芸術文化活動の復興

阪神・淡路地域における自主的復興活動への支援を基本に、被災地での芸術文化の復興に努め、地域の個性豊かな文化に磨きをかける文化再生の拠点となるまちづくりを進める。このため、県民の自主的芸術文化活動の基盤となる芸術文化施設を早期に再建するとともに、芸術鑑賞や芸術文化の創造、表現の機会拡充を図る。



芸術文化センター街区イメージ図

さらに、21世紀に向けての創造型・参画型の新しい芸術文化拠点づくりを進める。

- 芸術文化活動の支援
- 芸術文化施設の復旧
- 芸術文化施設の建設

(イ) 学校・文化財の復旧の支援

21世紀を担う人材の育成が不可欠であることから、子供達が学校生活を通じて生き生きとした生活を取り戻し、豊かなこころを持って成長していけるよう、学校施設の早期復旧を図る。

一方、人々の営みの歴史、すなわち生活文化の蓄積である文化財は、人の心をなごませ、阪神・淡路地域のうるおいと安らぎのある生活環境を取り戻すため、県民の生活文化の源流として重要な価値を持つ文化財の早期修復を図る。

- 学校施設の整備
- 文化財の修理・復元及び埋蔵文化財発掘調査の推進

(ウ) 街並み・景観の復興

歴史的に形成されてきた街並みは、地域の人々の生活、文化、産業等のスタイルによって特色づけられ、その地域の人々の生活文化の拠り所であるとともに、国内外に向かっては、人を引きつける魅力を生み出す要素となっている。

震災で失われた街並み・景観をその地域の歴史的沿革や震災後の新しい地域の特性を踏まえて再生する。

- 歴史的景観の復興
- 地域の特性を生かした街並みの復興

(エ) 参画型生涯学習システムの推進

県民の主体的参画による生涯学習を進めるため、博物館、美術館をはじめ各種基盤の復興を進めるとともに、体験学習を含む新しいプログラムを開発する。

学校、地域、家庭、職場や世代間の相互の連携と交流を推進するため、復興に向けた県民の自主的な活動を支援する。また、スポーツ・レクリエ

ーション施設の整備や活動の振興を通じて、県民のこころ豊かな交流を広げる。

- 生涯学習施設の復興
- 生涯学習活動の振興
- 共生のまちづくりの推進
- スポーツ・レクリエーション施設の整備
- 体験学習施設の整備
- 災害文化の継承

(オ) 国際交流拠点の整備とプログラム開発

21世紀の国際社会を視座におくと、被災地域の復興は世界都市関西の一翼を担い、日本の国際化のあり方を先導する地域としての復興であることが重要である。

世界の人々との共生社会づくりをより一層推進するため、外国人県民にとっても安全で暮らしやすい環境づくりや「こころの国際化」を推進するなど多文化型のまちづくりを進めるとともに、文化、経済、生活などさまざまな分野における国際交流活動の拠点とプログラムづくりを進め、共生と交流の理念に支えられた地域文化の創造を目指す。

- 多文化型のまちづくりへの支援
- 国際交流・協力の推進
- 復興を促進するイベントの開催

(カ) 都市と農山漁村の提携

都市・農山漁村の相互補完機能や信頼関係を構築するため、都市住民の参加と合意を得ながら、心の安らぎを覚える「第2のふるさとづくり」を推進するなど、都市と農山漁村の交流を基軸にした相互支援体制を整備する。

- 交流の組織と基盤づくり
- 人と自然とのふれあいの場の整備

ウ 既存産業が高度化し、次世代産業もたくましく活動する社会づくり

21世紀の成熟社会に向けた新たな産業構造を構築するため、既存産業の高度化、新分野進出といった従来からの取組みに加え、新産業創造システ

ムの形成、高度集客都市群の形成、国際経済文化機能ネットワークの形成を本格復興の3つの重点課題とし、計画的な復興に取り組む。

また、事業推進の際には、民間能力の活用を図りつつ、多様な産業基盤整備プロジェクトの適切な推進を図る。

(ア) 国内外へのアクセス整備と産業基盤づくり

港湾機能の早期復旧に全力を注ぐとともに、コンテナ埠頭の大型化など神戸港の国際ハブ港湾としての機能強化を進めるほか、超高速船にも対応できる多目的バースの整備など今後の新たなネットワークも視野に入れつつ、港湾、道路、鉄道、空港など国内外へのアクセス機能を充実する。このことにより、次世代産業の発展の基礎を固めるとともに、研究開発・技術（移転交流）基盤、アメニティを高める基盤等の高度な機能の付加を図る。

- 産業関連基盤の高度化
- バランスのとれた産業配置と広域的連携

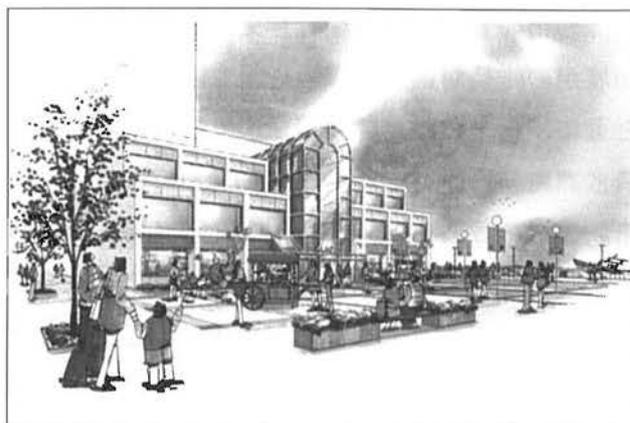
(イ) 国際経済文化機能ネットワークの形成

被災地域の内外に開かれた特性を生かし、国内外からの投資や外国企業の誘致を促進するため、輸入促進や内外企業の立地促進のための優遇措置等を行う制度としてのエンタープライズゾーンの設置とともに、民間能力を活用しつつ、ビジネスサポート機能を備えた国際ビジネスエリア、輸入直売専門店街、インターナショナルフードガーデン等の整備を図るインポートマートの設置、国際会議場や国際展示場、ホテル等を備えたコンベンションセンターの整備等を行い、これらの機能が有機的に連携する国際経済文化機能ネットワークを形成する。

- 世界都市機能の充実
- 内外の国際的企業の立地促進

(ウ) 既存産業の高度化

被災地域に集積する多様な産業は、これを機会に、大企業、中堅、中小企業とともに、復興に当



インポートマートイメージ図

たってはこれまでのあり方を抜本的に見直し、新しい事業手法・形態や新時代に対応した施設整備等に果敢に挑戦することで、将来の発展の基盤固めを図ることとし、行政はこれに対し最大限の支援を行う。

- 相談指導・支援体制の確立
- 復旧・復興のための金融支援
- 事業の場の確保
- 集客型産業の振興
- 商業の高度化
- 新分野進出等への支援

(エ) 新産業の創造・育成

新産業創造プログラムの充実や民間能力の活用等を通じて、21世紀の成熟社会にふさわしい新産業の導入・育成を進め、多様なニーズに対応し、持続的な発展を可能にする次世代型の産業構造への転換を図る。

- 新産業創造システムの形成
- 情報通信関連産業の振興

(オ) 農林水産業の振興

農林水産業については、消費者の安全志向や環境の保全等社会的ニーズに対応した生産、流通システムを構築するとともに、関連産業の振興を図る。

- 高付加価値型農水産業の振興
- 食品産業活性化のための体質強化対策

(ウ) 雇用の安定と地域産業を支える人材の育成

雇用の維持対策、離職者対策を強力に進めるとともに、企業の職業能力開発を支援し、産業の復興と高度化に対応した人材の確保・育成を推進する。

また、神戸港の近代化に対応した高度な港湾技能者を育成する。

- 雇用維持対策
- 離職者対策
- 人材育成・勤労者福祉対策

エ 災害に強く、安心して暮らせる都市づくり

大震災の反省と教訓を踏まえて災害に強い安全なまちづくりを目指して、地域防災計画を見直し、防災体制の充実強化を図るとともに、総合防災情報システム、防災拠点など防災機能の整備を進める。

(ア) 地域防災基盤の整備

災害による被害を防止し、又は最小限に抑え、迅速、的確な復旧を図りうる堅牢でしなやかなまちを構築するため、治水、治山、砂防、海岸整備等県土保全対策の徹底と、公共施設をはじめとする建築物等の耐震性、耐火性等の強化や太陽光発電等の新エネルギー利用システムの導入を図る。特に環境への負荷の低減、自然との共生に配慮しながら、都市基盤施設等をゆとりとうるおいのあるアメニティ豊かな空間として整備する。また、交通網、ライフラインの多重化を進めるとともに、災害に強い情報通信ネットワークを構築し、バックアップ機能を確保する。

- 防災都市整備指針の作成
- 防災機能の強化
- 公共施設等の耐震性の確保
- 多元、多重の総合交通体系の整備とライフラインの確保
- 廃棄物の適正処理の推進

(イ) 防災施設の整備

県及び市町の災害対策拠点などにおいて、情報

通信基盤の多重化等の機能強化を図る。また、県域、市町域、コミュニティそれぞれのレベルで、地域防災の拠点施設を整備するほか、消防防災設備や資機材についても、計画的な整備を図る。

- 災害対策拠点の整備
- 防災資機材の充実
- 防災拠点等の整備

(ウ) 防災マネジメントの充実

県その他の防災関係機関において、特に災害発生時に、防災施設や防災システムを円滑に活用し、災害に即応できるよう、職員の防災知識や災害対応力の向上、初動体制の確立等を図る。また、国、県、市町をはじめ、防災関係機関・団体の縦横の連携体制を一層強化する。

- 初動体制の確立
- 防災要員の充実
- 災害への対応力の向上
- 関係機関等の連携促進

(エ) 防災システムの充実

災害救援ボランティアの組織化とその支援システムを構築する。また、今回の震災と同程度の被害や、多数かつ長期にわたる避難者にも対応できるよう、救援・救護に係る各種のシステムを見直し、実効性あるマニュアルを作成する。

- ボランティアとの連携、支援の推進
- 国際協力・支援の推進
- 災害情報等の提供体制の強化
- 救援・救護活動等の円滑化
- 二次災害防止対策の強化

(オ) 地域防災力の向上

防災学習や自主防災組織の育成等を通じて、地域や家庭における生活文化としての防災意識を育み、これに根ざしたネットワーク型の防災コミュニティの形成を図る。

- 防災に関する学習等の実施
- 自主防災組織等の育成
- 災害弱者対策の強化

- 外国人県民対策の強化
- 企業等の地域防災活動への参画促進

(ウ) 調査研究体制等の強化

災害に対して万全の備えを講じよう観測体制の強化を促進するほか、国等とも連携をとりながら防災技術等に関する調査研究体制の充実を図る。

- 観測調査体制等の強化

オ 多核・ネットワーク型都市圏の形成

被災した阪神・淡路地域の復興に当たり、新たに都市核の整備が進む大阪湾ベイエリア地域や山陽自動車道沿線の内陸部との多核・ネットワーク型都市圏を形成し、安全で環境保全に配慮したゆとりある地域整備を進める。(図10参照)

(ア) 被災地における人にやさしいまちづくり

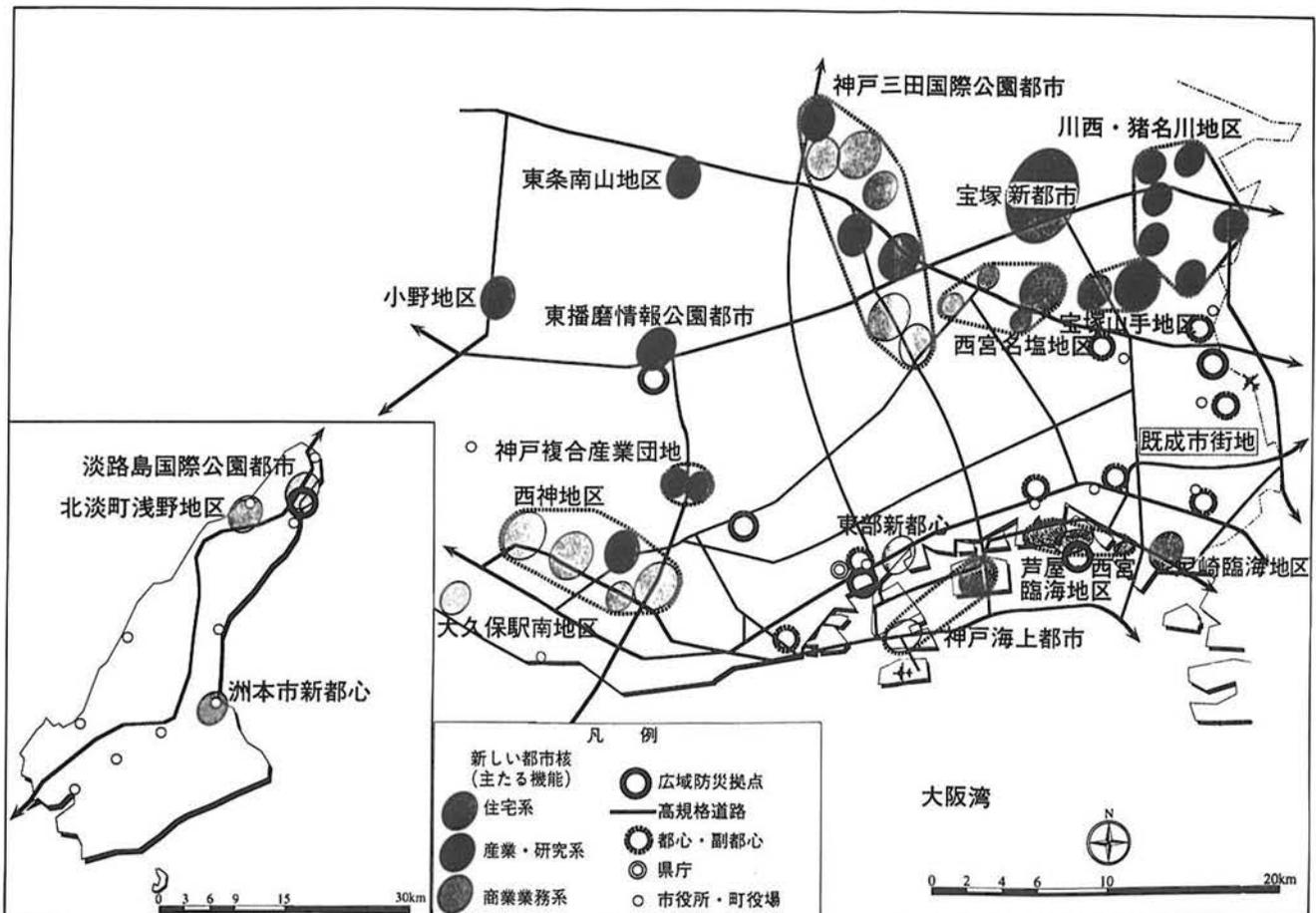
多核・ネットワーク型都市圏の形成に向けて、

既成市街地の居住や産業などの重要な都市機能を担うべき地域で被災の大きい地区については、市街地再開発事業、土地区画整理事業、住宅系面的整備事業を実施し、都市基盤の整備と都市機能の更新を図る。事業に際しては、被災者の住宅再建の希望に応えるため、街づくりと一体となった良質な住宅・宅地の供給とこれを支える基盤施設整備を進めるとともに、街並み・景観等ゆとりとうるおいのある美しい環境の創造や、高齢者・障害者等に配慮した人にやさしい街づくりを進める。

また、これらの面的整備事業等を活用し、オープンスペース等により構成される防災性の高い環境空間ネットワークづくりを推進する。

- 被災地における市街地再開発事業
- 被災地における土地区画整理事業
- 被災地における住宅系面的整備事業

図10 多核・ネットワーク型都市構造のイメージ



出典：「阪神・淡路震災復興計画」兵庫県

- 被災地における街並み・まちづくり総合支援事業
- 市街地防災強化街路ネットワーク形成のための街路等の整備
- まちづくり支援システムの確立

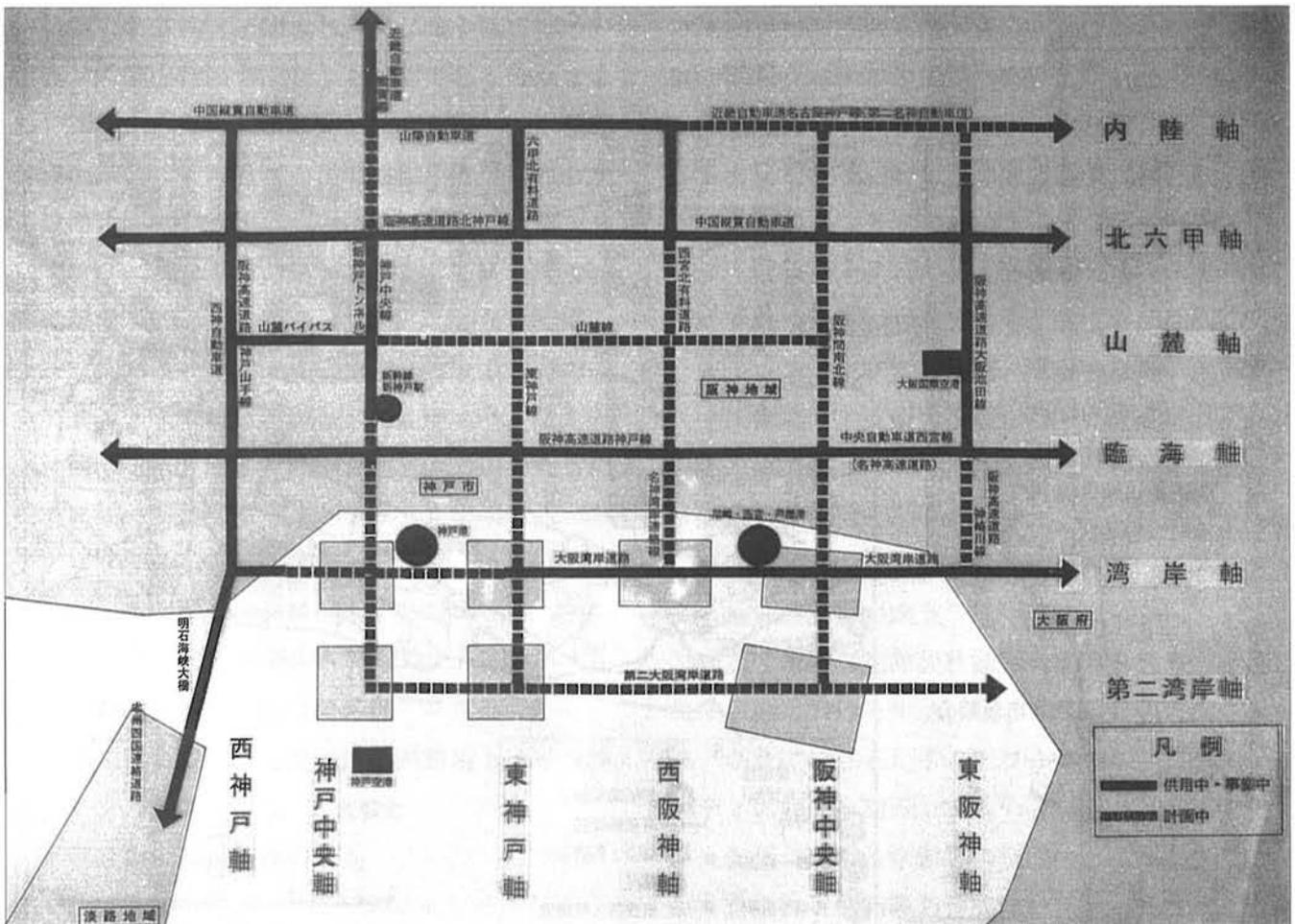
(イ) 被災地区の整備と連携した新しい都市づくり
 臨海部の埋立地、遊休地及び内陸部において、防災、福祉、環境等に配慮した21世紀型新都市を早期に建設する。これらの新都市は、住宅・業務・商業等の機能を併せ持ち、被災市街地の面的整備事業に伴う代替住宅等を提供する支援拠点ともなる。

また、建設に際しては、関連施設の誘致や積極的な民間活力の活用による施設整備を行う。

- 神戸東部新都心

- 西宮浜地区
- 鳴尾地区
- 南芦屋浜地区
- 尼崎臨海西部拠点開発地区
- 淡路島国際公園都市
- 宝塚新都市
- 東播磨情報公園都市
- ポートアイランド（第2期）
- 六甲アイランド
- 西神地区
- 神戸複合産業団地
- 東条南山地区
- 大久保駅南地区
- 小野地区
- 洲本市新都心

図11 格子型高規格道路網の概念図



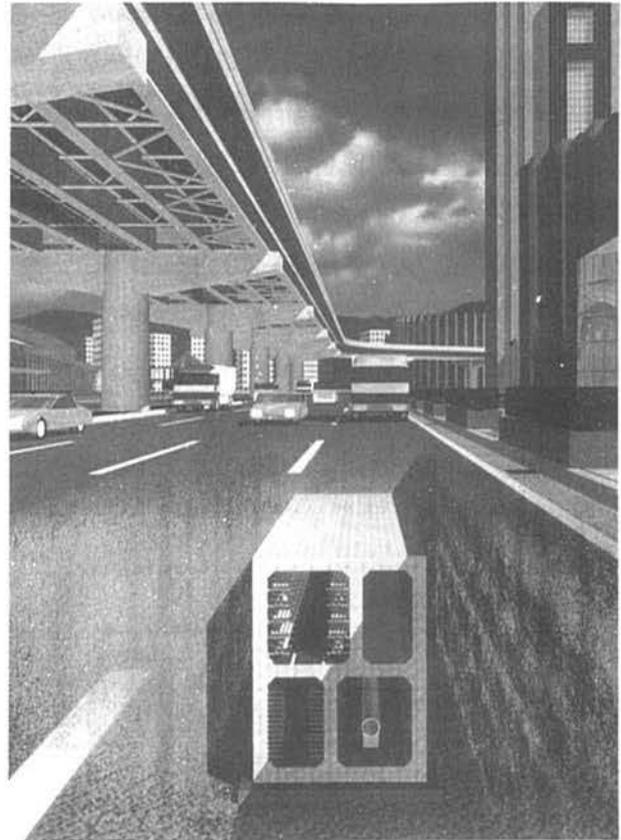
出典：「阪神・淡路震災復興計画」兵庫県

●北淡町浅野地区

(ウ) 陸・海・空にわたる多元・多重の総合交通体系の整備

復興を支えるとともに、新しい兵庫づくりを進めるため、格子型高規格道路網の形成とこれらを補完する一般幹線道路網及び主要な街路の整備、鉄道の迂回ルート of 整備等を推進し、道路・鉄道のネットワークを強化する。さらに、空港・港湾においては、それぞれの需要への対応と、背後圏の経済活動を支えるための機能強化や交通ネットワークの充実を図ることにより、交通量の分散やモーダルシフト等環境にも配慮し、耐震性が高く代替性を備えた陸・海・空の総合交通体系の整備を図る。(図11参照)

- 神戸港の復興
- 神戸港の復興を支えるとともに、大阪湾ベイエリア機能の復興・充実を図る高規格道路の整備
- 被災地の広域迂回路の確保を図るとともに淡路地域の復興を支援する高規格道路網の整備
- 被災地への南北大量輸送路の確保を図る高規格道路の整備
- 高速性、代替性を備えた格子型高規格道路網の整備
- 高規格道路網を補完するとともに、多核・ネットワーク型都市圏を支える一般幹線道路の整備
- 都市圏防災幹線街路ネットワーク形成のための街路の整備
- 幹線鉄道の迂回ルートの強化
- 被災地の鉄道の多重化、交通機関相互の連携強化
- 交通結節点・防災拠点としての駅の整備
- 海上コンテナ輸送の多重化に対応した港湾整備
- 港湾施設の耐震性強化
- 防災拠点として活用する港湾緑地の整備



共同溝の整備イメージ図

- 自動車乗入れ抑制対策の推進
- 災害時の交通拠点としての意義をも有する空港の整備

(エ) 都市基盤の早期復興

交通基盤、ライフライン施設、産業基盤等、破壊された都市基盤施設について、新しい防災思想と技術のもとで、環境保全に配慮しつつ、早期全面復旧に全力を傾注するとともに、光ファイバー網の整備等による通信システムの高度化や太陽光発電等の新エネルギー利用システムの導入等災害時のバックアップシステムの充実を図る。

- 交通基盤の復旧
- 防災インフラの復旧
- 防災まちづくりに供するライフラインの整備
- 災害に強い水道施設の整備
- 災害に強い工業用水道施設の整備
- バックアップ機能を伴う総合的な情報通信ネットワークの構築

- 代替次世代都市エネルギー基盤の形成
- 廃棄物の適正処理の推進

(オ) 防災拠点等の整備

広域的な救援・復旧のための拠点として、公園等の広場を中心に、災害時の情報通信機能を備えた広域防災拠点を、陸・海・空の交通アクセスに配慮しつつ整備する。また、広域防災帯、地域防災拠点の整備を推進するとともに、地域の自立的な防災機能を強化したコミュニティ防災拠点（防災安全街区）を形成する。さらに、県内の災害に

即応する諸機能を備えた県立防災センターの設置を推進するとともに、国際的な視野から防災に係る調査・研究や、人材育成等を行う国際防災センター構想を推進する。(図12参照)

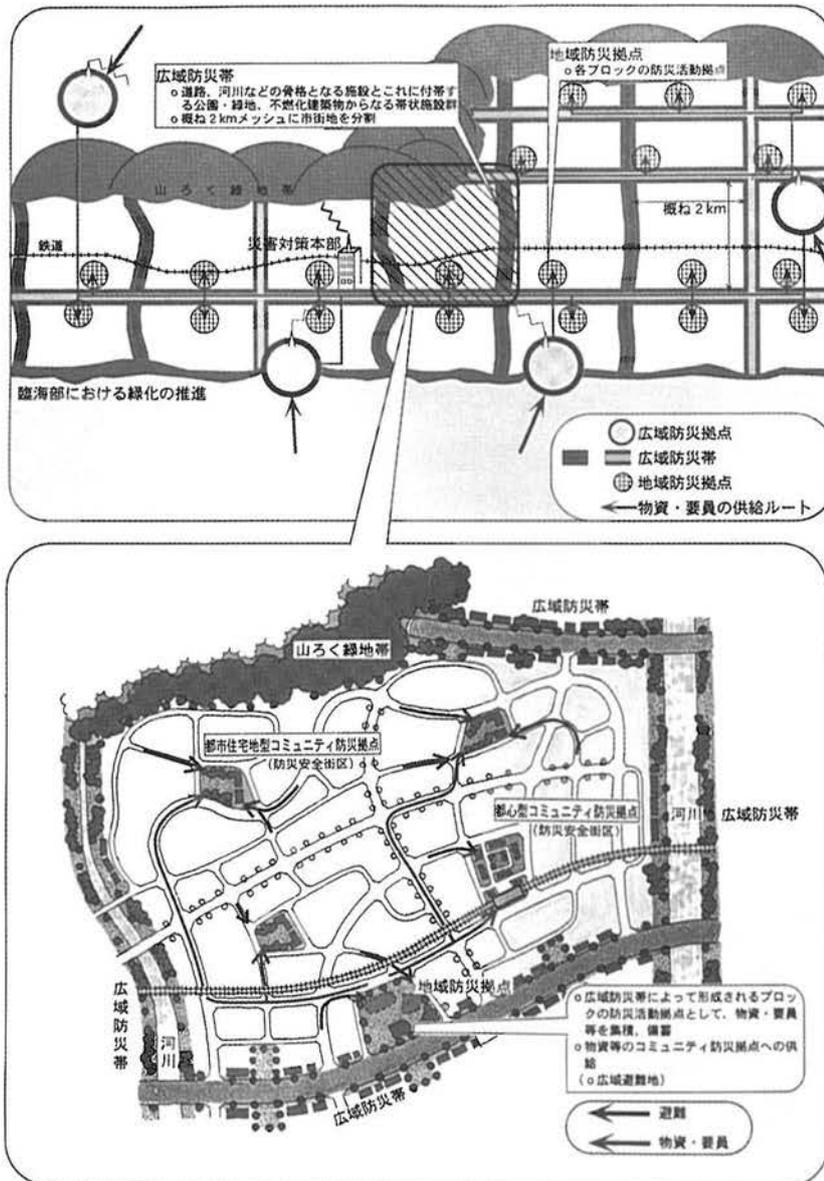
- 広域防災拠点の整備
- 広域防災帯の整備
- 地域防災拠点の整備
- コミュニティ防災拠点
- 都市防災不燃化促進事業

(カ) 災害に強い都市と農山漁村の基盤整備

風水害、土砂災害、山地災害、地震災害及び火災等に対する防災機能を強化し、二次災害の防止を図るとともに、阪神地域の河川における水環境の改善を進めるなど、自然と共生した都市、農山漁村づくりを進める。

- 二次災害防止・耐震性向上のための河川の改良復旧事業
- 緊急消火・生活用水等を確保するための防災ふれあい河川の整備
- 地域の復興に合わせた広域防災空間としての主要河川の整備
- 阪神地域の河川における水環境の改善
- 地域防災拠点としての海岸の整備
- 海岸保全施設の耐震性の向上
- 二次災害防止のための砂防施設等の整備
- 防災のための下水道施設の有効利用と再整備
- 災害時の消火、生活用水を確保するためのダムの整備
- 防災のための治山事業等

図12 市街地防災の考え方



出典：「阪神・淡路震災復興計画」兵庫県

- 防災機能・公益的機能を有した災害に強い農山漁村の整備

2 神戸市

神戸市復興計画審議会は、平成7年3月27日に「神戸市復興計画ガイドライン」を発表、「都市の機能性とゆとりとの調和」「自然の恩恵と厳しさとの共生」「人と人のふれあいと交流」を復興の基本理念として新しい神戸の復興を目指すこととした。そして6月30日「神戸市復興計画」を正式決定した。計画は、10年後を目標に約1,000事業が盛り込まれている。市民生活と都市基盤の早期復旧、災害に強い都市づくりなど9つの基本課題を提示したうえで、「目標別復興計画」「安全都市づくり」「市街地復興計画」の3つの総合計画に分け施策を挙げた。また17事業をシンボルプロジェクトとして、東部新都心計画や全長27kmの大容量送水管を新設する「災害に強いライフラインの整備」などが計画されている。

復興計画の構成は、以下のとおりである。

(1) 目標別復興計画

相互の関連を考慮しながら「安心」「活力」「魅力」「協働」の視点から施策を位置づける。

ア “市民の暮らし”を復興する

被災を受けた市民生活の再建と安定、シビルミニマムの回復・向上の視点から、居住の安定の確保、住環境の整備、保健・医療・福祉の充実、教育の再建、消費の安定等の施策を位置づける。

イ “都市の活力”を復興する

産業の早期回復を支援し、将来の神戸を支える産業の高度化や新産業の誘致・育成等を推進するための施策、市民生活や経済活動を支える基盤として港湾、交通ネットワークの整備等を位置づける。

ウ “神戸の魅力”を復興する

海や山などの恵まれた自然環境、国際性や進取の気風、培われてきた文化など神戸の個性を生かし、魅力あふれる都市づくりを進めるため、水とみどりを生かした快適環境づくり、文化の再生、国際性を生かした交流の促進、交流を支える基盤としての情報ネットワークの整備等を位置づける。

エ “協働のまちづくり”を推進する

まちづくりの歴史を受け継ぎ、震災の教訓を生かして市民・事業者・市が協働のまちづくりを進めるため、情報の交流、市民全体のまちづくりの支援、ボランティアや事業者との連携等の施策を位置づける。

(2) 安全都市づくり

市民生活の広がりに応じた災害への備えを「防災生活圏」で、災害時に安全を確保する空間の整備を「防災都市基盤」で、災害時に円滑に防災、救援活動が実施できるシステムづくりを「防災マネジメント」でまとめる。

ア 防災生活圏

地域での防災力を高め、住民や事業者自らが主体となり防災活動を展開する「近隣生活圏」、行政が中心となり災害を防止し、市民生活を支援する「区生活圏」、その中間であり市民・事業者・市そしてボランティアが協力し、災害を防ぎ、市民生活を維持する「生活文化圏」を設定し、それぞれの圏域での防災活動や拠点整備等を施策としてまとめる。(図13参照)

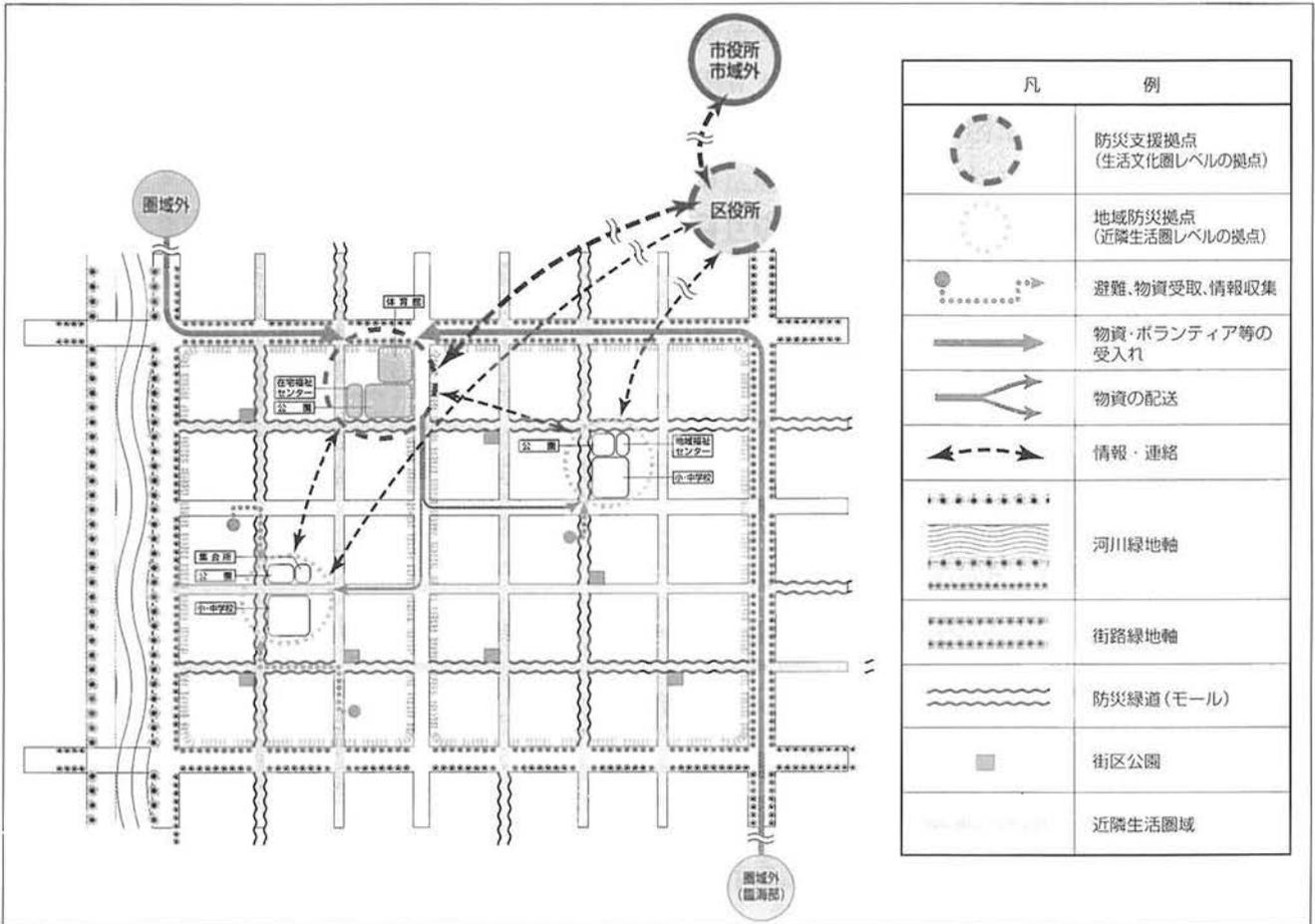
イ 防災都市基盤

神戸の地形特性を生かし、水とみどりを活用した防災緑地軸の整備、広域的な防災拠点の整備等、多様な災害に対応できる安全な都市基盤の整備に係る施策を位置づける。(図14参照)

ウ 防災マネジメント

緊急時の情報活動や防災活動、救援・復旧活動等を迅速・円滑に推進するための情報システムや連携体制、マネジメント、国際協力やボランテ

図13 防災生活圏のイメージ図（神戸市）



出典：「神戸市復興計画」神戸市

ィアとの連携に係る施策を位置づける。

〈方針〉

- 多様な災害に迅速かつ柔軟に対応できるよう災害への備えを充実する。
- 関係機関等との連携や防災システムを強化し、災害時の緊急対応力を高める。
- マネージメントシステムの整備や広域連携の推進により円滑な救援・復旧を図る。
- 災害を知り、適切な対応ができるよう災害文化の継承を図る。

(3) 市街地復興計画

被災が激しく、復興まちづくりを総合的に進める必要がある地域として「震災復興促進区域」を「都心地域」「東部市街地」「西部市街地」の3つに分け、それぞれの特性に応じたまちづくりの方

向をまとめる。特に地域の復興を牽引していく事業を「復興プロジェクト」として位置づける。

(4) シンボルプロジェクト

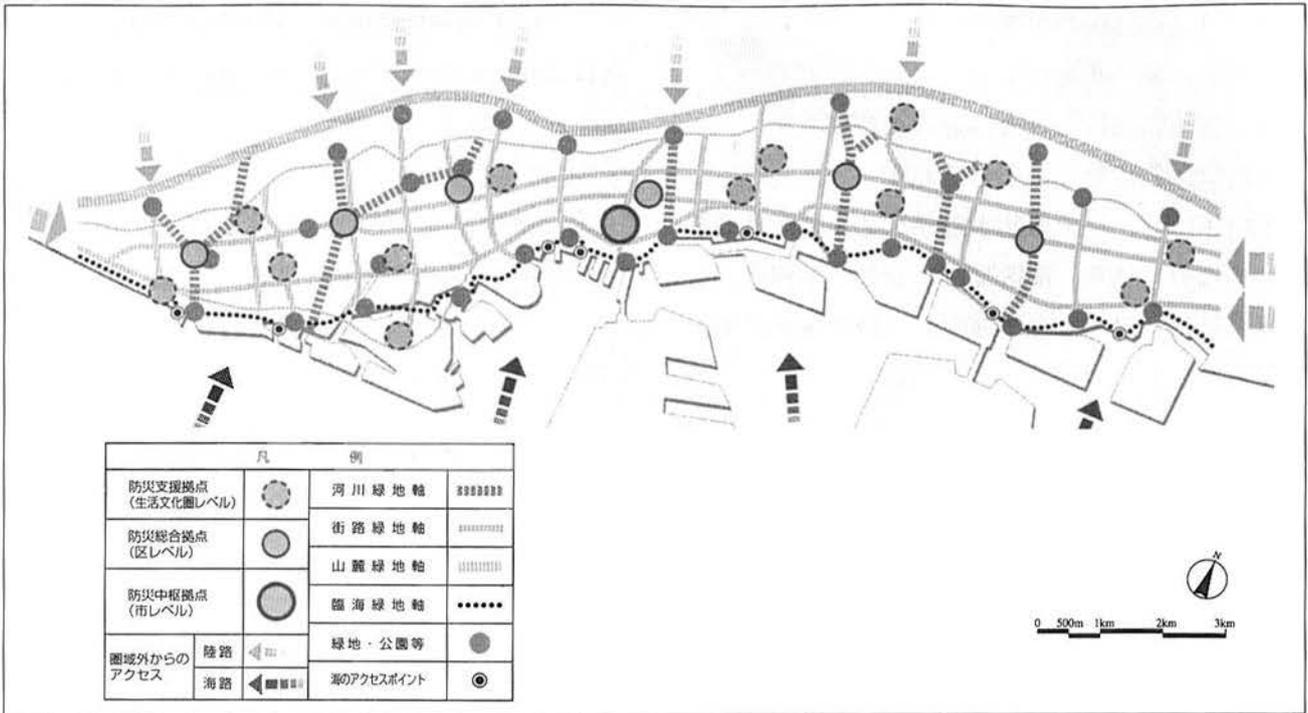
復興のための様々な施策のなかから重点的・総合的に進めるべきものを抽出し、特に緊急かつ重要なもの、神戸の復興を先導するもの、新しい神戸の復興を象徴するものとして、17のシンボルプロジェクトを位置づける。

(5) 実現に向けて

復興計画の効果的で円滑な遂行により、21世紀の国際都市神戸にふさわしい復興を図るため留意すべき事項を実現に向けての課題としてまとめる。

このほか、神戸市では、神戸市消防基本計画検討委員会を設置し、「神戸市消防基本計画策定にか

図14 防災緑地軸と防災拠点の構成（神戸市）



出典：「神戸市復興計画」神戸市

「基本的事項」についての諮問を行い、5月8日の答申を基に「消防基本計画」を策定した。これは神戸市復興計画の下部計画として、市の消防体制を強化するための諸施策の実施計画を定めるものであり、「国際防災モデル都市」を実現するための今後の消防体制のあり方を示すものである。

また、神戸市では「神戸港復興計画委員会」を設置。4月の神戸港復興計画委員会報告書では、「神戸港復興計画」について、おおむね平成17年を目標にした「神戸港港湾計画」に基づき、震災を乗り越えた21世紀の新たな港づくりを目指すなどの基本方針を発表、「神戸市復興計画」の一翼を担う計画として神戸港の港湾施設の復興に関する基本的事項を定めている。

3月には「神戸経済復興委員会」を発足。神戸経済の復興の指針と当面の応急的な復旧方策について検討し、「神戸市復興計画」に反映させるとし、6月に報告書が提出された。

3 阪神地域

(1) 尼崎市

尼崎市では、4つの基本理念に基づき、目標年次を2005年（平成17年）とした「尼崎市震災復興基本計画」を策定した。

ア 基本理念

- 市民・事業者の復興へのエネルギーを結集し、市民・事業者・行政の協働により進める。
- 人と人とのふれあいや助け合いなど、福祉の心を持った人にやさしいまちづくりを進める。
- 安全でより質の高い住宅と住環境を目指して復興を進める。
- 自然を生かした、みずとみどりのまちづくりを進めるなど、ゆとりのある空間を整備し、安全性の高い都市構造を実現する。

イ 基本計画

(ア) 復興に向けて

- 市民生活・事業活動の復興

- 公共施設等の復興
- 面的整備地区の復興

(イ) 災害に強いまちづくり

- 21世紀に向けた災害に強いまちづくり
- 防災体制の整ったまちづくり

尼崎市では、以上の基本計画を基に復興事業を進めるため、住宅、地区整備、公共土木施設、公共建築施設、上・下水道等の5分野の復興計画を策定した。

(2) 西宮市

「西宮市震災復興計画」においては、計画の目標年次を2005年（平成17年）とし、計画事業は、その緊急度に応じて、3年以内に重点的に対応するものとそれ以外のものに区分される。

計画の基本目標は以下の4つに分けられる。

- 安心して暮らせる、心かようまちづくり
- 災害に強い、安全なまちづくり
- 活力を生む産業のまちづくり
- 魅力あふれる環境、文化、地域社会づくり

基本目標を達成するため、各分野において推進する施策を「復興への施策展開」として、また、都市基盤整備を中心とした事業を「市街地の復興」としてまとめる。

ア 復興への施策展開

- 市民生活の安全、支援
- 安全で安心できるまちづくり
- 産業の振興
- 魅力ある地域社会の創出
- 環境と調和した、美しいまちづくり

イ 市街地の復興

- 市街地の面的復興整備
- 道路交通のネットワーク化等
- 港湾の整備
- 水と緑のまちづくり
- ライフラインネットワークの整備

「安全」「安心」そして「希望」に満ちた文教住

宅都市をめざし、以上の計画の実現に当たっては、行政手続きの一層の明確・効率化に努め、西宮に集うすべての人々を結集して、精力的に事業を推進するものとしている。

(3) 芦屋市

「芦屋市震災復興計画」においては、「快適で安全なまち」「自然と共生するまち」「人々のふれあいと文化豊かなまち」を復興の基本理念とし、2005年（平成17年）を目標年次としている。

まちづくりの目標として、

- 魅力ある芦屋のまちづくり
- 快適で安全なまちづくり
- 人と自然環境が共生したまちづくり
- 福祉が充実したまちづくり
- とともに築き助け合うまちづくり

を挙げている。

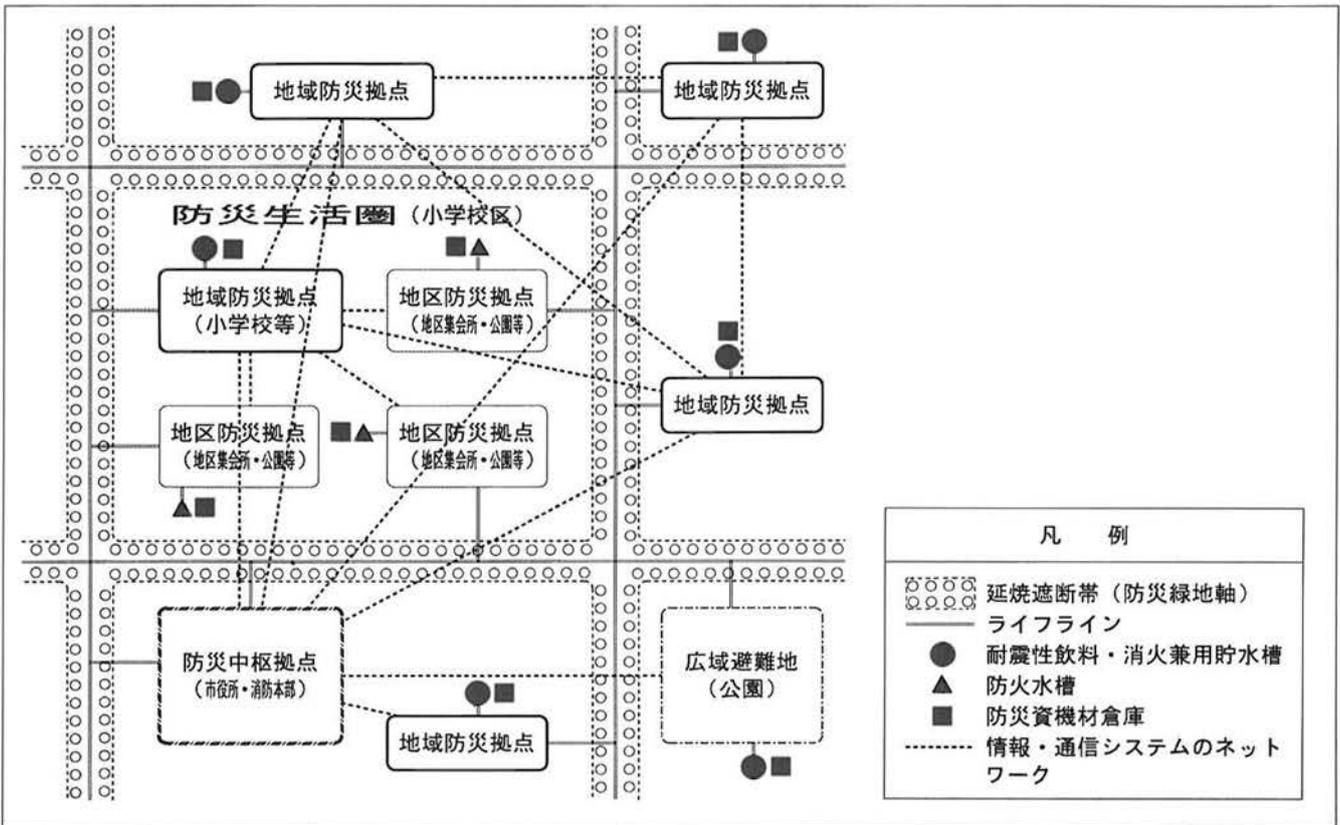
さらに、基本理念に示すまちづくりを目指した基本計画（図15参照）として、

- 防災体制の拡充
- 市街地の復興
- 住宅の復興
- 道路の復興
- 公園・緑地の復興
- コミュニティの活発化
- 自立・循環型環境の創出
- 健康づくりの推進
- 社会福祉の充実
- 市民文化の復興
- 生涯学習の充実
- 学校教育の充実
- 商業の復興

の具体的施策を積極的に進めていくものとした。

芦屋市では、事業の推進体制の確立を図るとともに、事業の優先順位を定め、財源確保に当たっては、行政内部で事務業務の見直し、組織・定員管理の適正化、職員給与の適正化等行財政改革を

図15 防災生活圏のイメージ（芦屋市）



出典：「芦屋市震災復興計画」芦屋市

積極的に推進し、経費の削減と効率的な行政運営に努めていくものとしている。

(4) 伊丹市

伊丹市では、「ともにつくる安心して暮らせるまち」を震災復興の理念とした「伊丹市震災復興計画」を策定した。計画の実施期間は10年間（平成7～16年度）を目途とし、特に緊急性の高い事業については、早期かつ重点的に実施し、復興を推進するものとした。計画の視点として、「まち」の復興と「くらし」の復興の2つに分けられている。

ア 「まち」の復興に関する計画

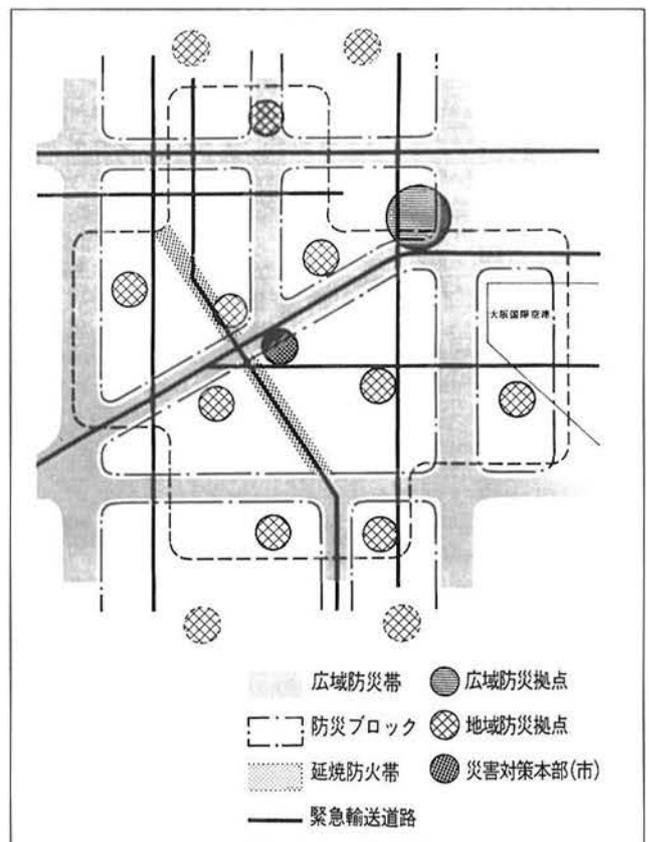
(ア) 市街地の復興

- 重点復興地域（阪急伊丹駅周辺）の復興
- 震災復興促進区域（旧村落部）の復興

(イ) 災害に強いまちづくり（図16参照）

- 都市基盤と防災拠点等の整備
- 公共建築物の安全性の確保
- ライフラインの安全性の強化

図16 防災帯・防災拠点の整備イメージ（伊丹市）



出典：「伊丹市震災復興計画」伊丹市

- 情報収集・情報提供策の拡充
- 大阪国際空港機能の活用

イ 「くらし」の復興に関する計画

(ア) 住宅の復興

(イ) 市民生活と産業の復興

- 市民生活の復興
- 産業の復興
- 伊丹文化の再生

計画の推進に当たっては、市民参加のまちづくり、行財政運営の充実等、関連計画への反映、広域的な連携体制の強化、戦略的復興事業の推進等を留意することとしている。

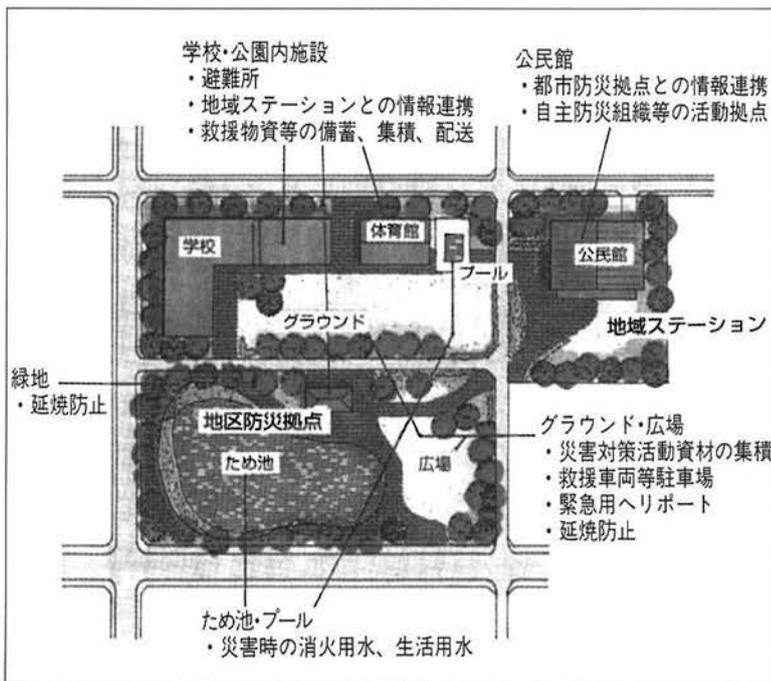
(5) 宝塚市

宝塚市では、「『人間の尊重』を基本とした安全で快適な都市づくり」を基本理念とした「宝塚市震災復興計画」を策定した。計画の目標年次は2005年（平成17年）とし、以下の構成となっている。

ア 目標別復興計画

- 「災害に強い都市の創造」安全居住都市をめざして（図17参照）

図17 地域ステーション及び地区防災拠点イメージ図（宝塚市）



出典：「宝塚市震災復興計画」宝塚市

- 「快適都市の創造」快適環境都市をめざして
- 「共生社会の創造」生涯福祉都市をめざして
- 「新しい宝塚文化の創造」文化創造都市をめざして

イ 市街地と住宅の復興のために

- 市街地の復興・整備計画
- 公共施設の復興・整備計画
- 住宅の復興・整備（供給）計画
- 重点的に施策を実施する地区等に係る計画

ウ 計画の実現のために

- 市民、事業者、市の協働によるまちづくり
- 国、県の支援と他の被災都市との連携
- 計画の充実に向けて

(6) 川西市

川西市では、目標年次を2005年（平成17年）とし、「水と緑の生活創造都市をめざして 人間中心のまちづくり」を基本理念とした「川西市震災復興計画」を策定した。

この計画では、今回の震災において展開された地域住民の相互援助やボランティアの支援活動が、

非常時における対応の大きな原動力となった現状をみて、自主防災組織の育成やボランティアとの連携等、特にソフト面に重点を置いて、

- 災害に強いまちづくり計画
- 公共施設の復旧・整備計画
- 被災市民の生活援護及び産業の復興方策

などを柱としている。

川西市では、この復興計画を基本に、市総合計画「川西こころ街計画2002」の施策の大綱に沿って復興事業を計画的に推進し、生活創造都市の実現を目指すものとしている。

4 淡路地域

淡路島各町においては、災害対策本部から復興本部に名称を変え、復興に向けての取組みが展開されている。各町の復興計画は表13のとおりである。

表13 淡路島各町の復興計画

地域	復興計画の名称	日程
津名町	津名町復興計画(仮称)	平成8年3月計画策定
北淡町	北淡町震災復興基本計画	平成7年6月計画策定
一宮町	密集住宅市街地整備事業計画	平成7年9月基本計画(案)の提示
東浦町	漁業集落環境整備事業計画/密集住宅市街地整備促進事業計画	平成7年度中事業計画策定・着手
五色町	五色町兵庫県南部地震復興計画	平成7年6月計画策定

表14 新規建設・既存住宅の供給計画

対象	住宅種別	戸数	住宅の概要
借 低所得者層	新規建設 災害公営住宅	400	所得の低い被災者に対して供給する公営住宅で、激甚災害の指定により通常より高い補助を受けることができる。
	新規建設 特定借上賃貸住宅等	600	民間の土地所有者等が建設する賃貸住宅を市等が借り上げて、公営住宅階層の被災者に対して供給する住宅等で、国から市に対して建設費、家賃減額費等の一部について補助がある。
	新規建設 地域整備事業関連住宅	200	豊中市庄内地区で行う住宅市街地総合整備事業等の地域整備事業による従前居住者用賃貸住宅等で、主として所得の低い被災者の住宅として活用する。
家 中堅所得者層	既存活用 既存公営住宅等空家活用(建設中含む)	600	公営住宅の空家等を所得の低い被災者の住宅として活用する。
	新規建設 特定優良賃貸住宅	500	民間の土地所有者等が建設する賃貸住宅を市等が借り上げて中堅所得者層の被災者に対して供給する住宅で、国から市に対して建設費、家賃減額費の一部について補助がある。
	新規建設 民間賃貸住宅	100	土地所有者等が被災者向けに建設する一般の民間賃貸住宅。
	既存活用 既存公社・公団賃貸住宅活用(建設中含む)	200	住宅供給公社や住宅都市整備公団の空家を被災者の住宅として活用する。
持 家	新規建設 民間住宅	800	住宅金融公庫融資、府の個人住宅建設・購入資金融資あっせん制度等を活用し再建される持ち家住宅。
合計		3,400	

注) 新規建設については、平成7～8年度の2カ年で着工・認定等を行う。

出典：「大阪府住宅復興計画」大阪府

5 大阪府

〈大阪府の住宅復興計画〉

大阪府では、阪神・淡路大震災により豊中市を中心に大阪市、箕面市、池田市、吹田市などで住宅に大きな被害を受けた。このため大阪府住宅復興計画を策定し、被災地の実情に沿った施策を推進することにより、被災者の居住の安定を図ることとした。

〈大阪府の住宅復興計画の基本的な考え方〉

i 全壊した住宅戸数等に対応した住宅の供給
全壊した住宅への対策については、府・市が中心となり、原則として当該被災市域内に表14のとおり3,400戸の住宅を供給するものとする。

なお、半壊により撤去等を行った住宅への対策については、公営住宅等の空家を活用するほか、

被災市の地域の実情に応じて市が施策を講じるものとする。

ii 民間賃貸住宅の復興支援と地域整備の推進

木造賃貸住宅に大きな被害が生じた豊中市庄内地区などで、土地所有者等による被災者向けの賃貸住宅の速やかな建設を促進するとともに、公的賃貸住宅として積極的に活用する。

また、密集住宅市街地整備促進事業や住宅地区改良事業等により、住宅の供給を促進するとともに、公共施設の整備を図る。

iii 住居費負担への配慮

被災した府民の所得階層等に配慮し、災害公営住宅を建設するとともに、特定借上賃貸住宅や特定優良賃貸住宅など家賃補助を伴う公的賃貸住宅の供給を促進する。

iv 安全で快適な住宅づくり

新しく建設する住宅は、高齢者・障害者をはじめすべての人が安全で快適な生活が確保できるよう、構造、設備に配慮したものとする。

v 半壊した住宅に対する融資等の支援

半壊した住宅等に対しては、補修等の復旧に積極的に助成し、居住の安定を図る。

第2 (財)阪神・淡路大震災復興基金による支援対策

地元地方公共団体においては、阪神・淡路大震災の早期復興のため各般の取組みを補完し、被災者の救援及び自立支援並びに地域の総合的な復興対策を長期・安定的、機動的に進めることを目的とした財団法人阪神・淡路大震災復興基金を平成7年4月1日に設立し、政府においても積極的に支援することとなった。

同基金の規模は6,000億円で、そのうち出資金200億円、長期借入金5,800億円を、兵庫県と神戸

市がいずれも2対1で負担する。

主な事業は平成7年度から10年間に実施されることとなった。

1 住宅対策

住宅対策として、同財団は、住宅金融公庫の災害復興住宅融資を受けて、災害復興住宅を購入する者や小規模又は不整形な敷地を共同利用して一構えの共同住宅を建設する者に対し、当初5年間を実質無利子にするなどの利子補給を行う。

また、民間の土地所有者等が建設する賃貸住宅を住宅供給公社等が借上げ、または、管理を受託して公的な賃貸住宅として供給する災害復興準公営住宅に係る住宅金融公庫からの借入金に対しても利子補給を行い、当初5年間を実質無利子にするよう措置された。さらに、住宅を再建する者のうち、既存住宅ローンの償還等のために償還額が償還能力を上回る者の負担軽減を図るため、住宅金融公庫及び県・市町単独住宅復興融資借入金に対する利子補給や、地震により被災した宅地の早期復興を促進するため、防災工事資金に対する利子補給を行う。

2 産業対策

産業対策としては、被災した中小企業者の政府系中小企業金融機関（中小企業金融公庫、国民金融公庫、商工中金）借入に対する利子補給を行い、当初3年間を実質無利子にする措置がとられる。また、失業の予防に資するとともに、事業活動の再開等に向けた雇用の維持を奨励するため、企業における休業など雇用維持の措置に要した経費の一部を助成する。そのほか地域産業の発展のため、新たに事業を興す中小企業者に対して長期的な視点に立つての助成等を行う。

3 生活・教育対策

生活対策として、住宅再生計画による恒久住宅建設地域に設置される「コミュニティプラザ」の整備費や被災者の避難生活、自立を支援するボランティア活動に対する助成を行う。また、「こころのケアセンター」1カ所及びブランチとして保健所単位に12カ所設置される「地域ケアセンター」の運営費を助成する。

また教育対策として、私立学校等の復興に対する支援や文化財所有者の被災修理費用に対する助成等の教育対策事業を行う。

第 6 編

阪神・淡路 大震災を振り返って

35人の 証言で綴る 1月17日

すべてが初めてだった。

その日、阪神・淡路地域はいつもと変わらぬ朝を迎えようとしていた。平和で活気に満ちた一日が始まるはずだった。しかし、時計の針が5時46分を指した数十秒後、巨大な力が大地を激しく揺り動かし、一瞬にして街は廃墟と化した。助けを求める人々の絶叫とともに、紅蓮の炎が街を嘗め尽くしていった。惨状を呈する被災地で、この突発的な大災害に立ち向かう人々の姿がそこにあった。

日本消防協会地震等防災対策委員長	石川 十四夫
兵庫県消防協会会長	溝口 信次
神戸市西消防団長	木村 忠夫
神戸市西消防団伊川谷支団長	三浦 晋
神戸市東灘消防団御影西分団長	三木 基弘
尼崎市消防団副団長	織部 義晴
芦屋市消防団長	川合 友一
神戸市西消防団玉津支団副支団長	北井 道男
津名町消防団長	松本 英志
北淡町消防団長	繁田 安啓
一宮町消防団長	室田 賢一
神戸市西消防団榎谷支団副支団長	平山 寛行
明石市消防団長	山崎 忠義
姫路市網干消防団長	山田 昇代
山崎町消防団部長	助光 梅三
大阪府消防協会会長	森 益三
大阪狭山市消防団長	小林 末好
八王子市消防団長	浅岡 富男
神戸市消防局生田消防署	中谷 満治
西宮市消防局長	岸本 健江
兵庫県婦人防火クラブ連絡協議会会長	前澤 朝子
神戸市北区婦人消防隊連絡会会長	藤原 孝徳
三ツ星ベルト株式会社専務取締役	松本 惠美子
神戸市北区道場婦人消防隊隊長	山元 博子
神戸市北区淡河婦人消防隊隊長	小西 博子
六甲アイランド病院救急部長	切田 学昇
神戸大学医学部付属病院救急部長	石井 幸恵
（当時）神戸大学医学部付属病院看護部長	新道 幸久
兵庫県立西宮病院救急医療センター部長	小林 千鶴子
神戸大学医学部付属病院集中治療部副看護婦長	小田 賢治
日本赤十字社兵庫県支部事務局長	荻野 耕次
（当時）神戸市立生田中学校長	和田 耕仁
神戸市長田区西代戸崎自治会連合協議会副会長	三宅 俊晃
（当時）神戸商船大学白鷗寮自治会会長	有田 敏晴
京都大学法学部学生	上田 敏晴

大震災の体験、教訓を決して風化させてはならない

～被災地消防団活動に感銘～



日本消防協会地震等防災対策委員長
(日本消防協会副会長/北海道消防協会会長/
夕張市消防団長)

石川 十四夫

震災から1年余になろうとしている被災地は、いまだにいたるところで震災の爪痕が生々しく残っており、改めて戦後最大の阪神・淡路大震災の被害の甚大さ、深刻さを肌身で感じました。

また、一方で復興に向けて、被災者の方々が力強い歩みをされていることに心から感激し、この不幸にもめげずに希望を持って頑張っていたきたいと思います。

特に、消防職団員の皆様が、当然の使命とはいえ、自らも被災され、想像を絶するような困難な状況のなかで、住民の生命、身体、財産を守るため不眠不休で活動されたことをお聞きして、心の底から感銘を受け、最大の敬意を表するものがあります。

さて、私の出身地であります北海道も度々、地震被害に見舞われております。最近においても北海道南西沖地震、北海道東方沖地震等がいまだ記憶に新しいところであります。今回の阪神・淡路大震災でも2名の行方不明者が出ておりますが、2年以上前の南西沖地震では津波によって、現在でも28名の方が行方不明となっております。今回は特に津波による被害はありませんでしたが、大都市部における津波対策も考えておく必要があると思います。

今回の阪神・淡路大震災の特徴は近年発生した

地震災害と違って、地震の規模が大きいということ以上に高速道路や新幹線の損壊、建物倒壊、ライフライン施設等の被害が広範囲にわたったことであるといえると思います。都市直下型地震の恐ろしさをまざまざと見せつけられました。大地震とはいえ、近代的な都市がこうも簡単に破壊され、都市機能が麻痺してしまったことに大きな驚きと、自然の脅威に対する人間の無力さを感じました。

私も消防団長を長年やっておりますが、今回は被害があまりにも大きかったために、結果的に消防力を早期に大量に動員できなかっただろうと思います。つまり、消防力をはるかに超えた災害であったといえるのではないのでしょうか。このような災害であればこそ、ますます地域の防災リーダーとしての消防団が重要な役割を果たし、また多くの被災者の心の支えにもなったものと確信します。

実際に被災地を見て、また、活動された方々のお話を聞いて感じるのは、まず第1にこのような貴重な体験、教訓を決して風化させることなく、防災関係者はもちろんのこと、一般住民の方々も含めて、後世に語り継いでいかなければならないということです。

また、大都市の消防団活動における可搬式ポンプの活用を図るべきであると考えますし、さらに防災体制を強化するうえで、財政力の弱い市町村に対する支援策について、今後検討していく必要があると思います。

日本消防協会地震等防災対策委員会としても、これらの教訓を今後の震災対策に反映すべく、2月10日代議員会で決定した7項目の決議事項を基本に関係機関に対して更なる要望をし、早期実現に向けた努力をしていきたいと思っております。

大震災を乗り越えて

～悲しみに耐え頑張った消防団～



兵庫県消防協会会長
(尼崎市消防団長)

溝口 信次

近代的なビルが建ち並び、人々の平穏な生活があった神戸・阪神・淡路に、草むらとなって広がるさら地を目の前にするとき、あの忌まわしき大震災によって、この地で多くの人が崩れた家の下敷きとなり、猛火に焼かれ、苦しみのうちに命を奪われていったことを思い、私は、今なお悲しみに胸が張り裂けそうになり、目頭の熱くなるのを禁じえません。

平成7年1月17日午前5時46分、突然の激しい揺れとあらゆるものが破壊される音に眠りを破られたまちは、高速道路や新幹線の橋桁が落ち、ビルやマンションが崩れ、民家が押しつぶされてきました。人々は余震と、迫り来る大火に恐れおののき、頭から血を流す人々が巷をさまよっていました。その様はさながら地獄絵図を見るがごとくで、私の長年の人生においても多くの災害を経験してきましたが、このような大震災は初めての体験でした。

大きな揺れがおさまるやいなや、尼崎市消防団長である私は、すぐさま市消防局に駆け付け消防団本部を開設しました。そして通じにくくなる電話を頼りに、市内の情報を収集するとともに、神戸・阪神間の消防団長に被害の状況や応援出動の要否について連絡をとり続けました。市内の被害に対しては、火災の警戒、警備などに消防団員を

振り分けるとともに、地震被害の最も大きい神戸、芦屋市への応援出動を決定し、私も自ら約2カ月の陣頭指揮に当たりました。

被災地では消防団員の必死の活動が繰り返られていました。自らの家が被災したにもかかわらず、また家族が生き埋めになっていたにもかかわらず、地域を守る消防団員としてあとを家族に任せて消火や救助救出活動に全力を挙げて立ち向かっていきました。昼夜を分かたぬ不眠不休の活動の挙げ句、過労に倒れ帰らぬ人となった消防団員もおられました。

一方、震災当日の午後には、全国から瓦礫の山となった被災地へ救援物資がどんどん届きはじめる県内の物資集積地となった消防学校やグリーンピア三木などでの物資の搬出入作業に、県災害対策本部から消防団の動員についての要請を受けたため、兵庫県消防協会長として私は、緊急役員会を招集し、すぐに被災地以外の全消防団に出動の協力要請を行いました。各消防団は、迅速に応援部隊の編成を行い、厳寒のなか、3月まで1日も途切れることなく交代で出動し、県からの要請に見事に応えてくれました。

私は、今回の大震災で展開されたこのような一致協力した獅子奮迅の消防団員の活動を、正に消防団の亀鑑として大いに誇らしく思うとともに、消防団員一人ひとりに心から感謝の誠を捧げたいと思っております。

また、このたびの震災では、日本消防協会をはじめ全国各地からお見舞いや義援金を頂戴いたしました。被害の甚大さゆえに震災復興への遠い道のりの不安を覚えつつも、こうした多くの方々からの心温まる支援の手が差し伸べられていることを実感し、心強い限りでありました。誠にありがたく、心より感謝申し上げる次第であります。

私は、今、震災で亡くなられた多くの御霊の安らかならんことを心から念じつつ、その尊い犠牲

に報いるためにも、大震災の教訓を生かし、私たち地域の“防人”としての消防団が先頭に立って、災害に強い安全なまちづくりを進めていかなければならないと改めて強く感じております。そして、今後もより一層消防団活動に精進していきたいと決意しております。

地域住民の期待に応える消防団として何が必要か



神戸市西消防団長
(神戸市消防協会会長)
木村 忠夫

西区消防団は7支団、97班、団員1,430名で構成されており、災害発生時には消防署と連携して消防活動に当たっています。

今回の震災では幸い西区は大きな被害がなく、当日の夕方から大規模火災が発生した長田区の応援活動に当たりました。長田の火災はこれまで経験したことの無い大火災でした。応援に駆けつける途中、高台からおびただしい黒煙がもうもうと立ち上っている長田の市街を視野に捕らえたときは、正直行ってひるみました。あまりの惨状にベテラン団員できえ、「団長、あの中に入るんですか」と尋ねたほどです。

長田消防署長から、まだ消防車が1台も入っていない戸崎通・西代通の消火に当たってほしいとの要請を受け、18時30分、消火活動に入りました。先発隊、後続隊合わせて150名の団員が力を結集し、様々に発生するトラブルにも必死で対処し、延焼拡大している猛火を予定した箇所では何とか翌日の午前3時すぎに鎮火することができたときに

は、さすがに団員も寒さと空腹が重なり疲労困憊の様子でした。1月20日以降、神戸市消防局及び応援消防隊のために食料を届けるなどの後方支援活動に当たりました。

今回の震災で威力を発揮したのものとして、第1には機動力のある軽四輪の積載車が挙げられます。渋滞する幹線道路を避け、裏道を走行するときには小型の積載車の方が都合よく、亀裂が入り瓦礫が散乱した道路を走行するにも小型の積載車は活躍しました。西消防団では97班すべてに積載車を配備できるよう関係各位に依頼し、既にプロゴルフトーナメントの賞金から数十台寄贈していただきました。次に今回ほどトランシーバーの必要性を痛切に感じたことはありません。ホースを2,400m延長しなければならず、号令のたびに伝令を走らせたのですが、大変な重労働でした。また、救出活動に要するのこぎり、バール、チェーンソーなどは最低限、装備しておきたい道具です。

機材を充実させる一方で、市民の防災意識が高まるような広報活動を積極的に行っていく必要性も感じました。自らの安全は自ら守る。そうした意識を市民一人ひとりが持てるよう行政PRしていくべきではないでしょうか。いま地域を守る組織として消防団が見直されています。そうした市民の期待に応えられるよう今後もいっそう消防隊との連携を強固なものにし、これまで以上に市民から信頼される消防団として精進していかなければならないとつくづく感じています。

震災により多くの尊い命が失われました。亡くなられた消防関係者並びに被災しながら懸命に働いたすべての消防団員に、次の歌を捧げます。

家失し被災の身をも顧みず人に捧げし命尊し

2400mのホース延長に苦慮する



神戸市西消防団伊川谷支団長
三浦 晋

地震当日の午前中は区内の被害状況を確認して回りましたが、幸いにも西区の被害は軽微でした。昼頃、団長から支団長会議を持ちたいとの連絡があり、管轄区域の状況を報告するとともにテレビの報道から長田区がひどい状況であることが伝わっていましたから、何とか長田に応援に行っていきたいと総意がまとまりました。そこで、改めて16時に消防団本部のある西消防署に集合し、市の消防本部から長田を応援してくれとのコンタクトがあり、16時30分、第1陣として消防車9台、7支団、団員51名で出動しました。

1時間あまりかけて長田消防署の対策本部に行き指示を仰ぐと、戸崎通・西代通の火災現場はまだ1台の消防車も入っていないとのこと。西消防団がその火災現場を受け持つこととなり、消火栓、防火水槽は使用できないので西代プールの水を使うことにしました。しかし、大渋滞の道路を前進するのは難しく、やっとの思いで西代プールに部署することができました。プールの水は幸運にも満水であり、しかも高飛び込みのプールもあって、とても心強い思いがしました。しかし、水源のプールから先、車で現場に入ることはとても不可能な状況であるため、300m間隔に8台の小型動力ポンプを配置し、その間は車に積んである20mホース15~18本をすべてつないでやっとのことで延長したのです。また、4人でポンプを運んだのです

が、道路は陥没していたり、倒れた家の屋根で塞がれていたりして、歩行も困難な状況にあり、線路の枕木の上を歩いて運んで行きました。一番先のポンプは約2kmほど手運びしたことになります。こうして、戸崎通・西代通に部署したのが18時30分頃。筒先は2線に分けて放水したものの、あまりに火勢が強いため、正直いって我々西消防団だけではとても心細く感じられました。第1陣は夜11時まで消火活動に当たり、その後は第2陣が引き継ぎ、翌朝3時まで活動は続けられました。

当初は「頼りない消防だ」とか「早く消せ。何やってるんだ！」と、我々に食ってかかっていた住民も、着ていた法被の「西」の文字に気づき、「西区から応援に来てくれたのか。遠い所をよう来てくれた」と言ってくれるようになりました。このようなパニックのなかで消防活動をするのができたのは「ポンプ操法競技会」（年1回開催しており、既に39回実施。）の訓練のお陰だと思いました。

町内会と消防団が結束、月1回の放水訓練が役立つ



神戸市東灘消防団御影西分団長
三木 基弘

今回の震災では6,308人の尊い命が失われましたが、私たちの町内でも多くの犠牲者が出ました。32人の方々が亡くなり、そのなかには自治会副会長がいますし、私の母も家の下敷きになって亡くなりました。

地震発生直後、1階に寝ていた母親を大声で呼

んでも返事がありません。必死で姿を探しているうちに近くの家が小火を出したものですから、母親は死んだものとあきらめ消火活動に向かいました。このときすでに消火栓からは水は出ませんでした。しかたなく消火器で消そうとしましたが、小火とはいえ火勢が強く消えませんので、本管のなかに残っている水をポンプ車で吸い上げて何とか消火することができました。

いったん家に引き返して母親を救出しましたが、もう既に息はありませんでした。このときあちこちで火事だという声が上がっていましたので、母親をそのままにして私は御影の火災現場に向かいました。着くと既に町内の人たちが暗渠になっている川から水を汲み、必死になってバケツリレーをし、消火に当たっていました。若者が3mの高さがある暗渠の底に降りて、懸命に水を汲んでいます。しかし、火勢が強く、とてもそこにある水だけでは消し止められそうにありません。消火栓から水は出ませんので、我々消防団員が毎月1回、放水訓練をしている乙女塚の大きな井戸から水を取ることにしました。ホースを200mほどつなぎ、死角になるところには団員を配し、手信号で合図しながら放水しました。それでなんとか鎮火させることができましたが、井戸の水には限りがあり、完全消火には至りませんでした。5～6時間もするとまた火の手が上がり、夜中に「火が上がった」とだれかが知らせに来て、我々は再度消火に向かいます。これが3日3晩続きました。このとき、消火に当たっていた団員は皆、死にもの狂いでした。家族のもとに戻ってあげたいだろうに、それもままならない。おまけに長靴をずっと履き続けていたため、足がふやけてしまい満足に歩けない状態でした。

今回の震災では、我々消防団は消火活動する間も家の下敷きになった方の救助もしましたし、18日には御影浜町（東部第2工区）でLPGタンクか

らガス漏れが発生し、爆発の恐れがあるため避難勧告が出されましたが、その際には避難するよう住民に呼び掛けて回りました。今回の震災を振り返って思うことは、町内の方たち全員が協力し、また、団と住民が一致団結して自分たちの住む町を必死に守ろうとしたことです。これは日頃から町内会の祭りなどを通じ、町内会と消防団のコミュニケーションがうまくとれていたからだと思います。

消防団服を脱いで情報収集に走る



尼崎市消防団副団長
織部 義晴

地震発生直後、被害状況を確認するべく団員を情報収集に出しました。その際、自分で見たことだけを報告するように言いました。といいますのは、噂ほどあてにならないものはないからです。人に聞いたことなら自分の目でそれを確かめてから報告するよう指示を出しました。また、動揺している住民から何か尋ねられたら、「大丈夫です。何かあれば、皆さんに真っ先にお伝えします」と言って、落ち着かせるよう指示して送り出したのです。

ところが、送り出した団員がいくら待っても帰ってきません。ようやく戻ってきた団員に聞きますと、消防団の服を着ているものですから、住民に助けを求められるようなのです。家がつぶれて家族が埋まってしまった。消防団の人ならなんとか助けてくれないか。そうやって泣きつかれてし

まうのだそうです。しかし、こちらとしてはまず情報を集めたい。地区の被害状況をつかみたいのです。そこから対策を講じなくては効果的な救助活動に入れなのです。情報収集に出る団員には途中から団の服を脱がせました。消防団の誇りである団の服を脱ぐのには大変抵抗がありました。住民を見捨てるのではなく、任務を遂行するために服を脱がなければならないときもあるのです。今後、こうした大規模災害に見舞われたとき、服装に留意して情報収集することを提案させていただきます。

その後、消火栓の確認に走らせました。30分ほどして戻ってきた団員から消火栓はすべて水が出ないという報告を受けました。そこで普段、訓練をしている河川3カ所から水を取り、火災にはそれに対応することにしました。

また市の南部、港に近いところでは液状化現象が起きました。不思議なことに地震発生後10分から20分ほど経過して、泥が吹きだし、ひどいところでは民家が道路より70cmも下がり、そのため埋設されている配管が軒並み壊れていました。

今回の震災で感じたことは、こうした緊急時には住民だれもが混乱しており、誰かがリーダーシップを取って強い口調で指示しないことには二次災害を引き起こしかねません。実際、ガス漏れが発生しているところでタバコを吸おうとする人さえいましたし、傾いた電柱の下にかたまっている人たちもいました。また、災害に迅速に対処できる消防団員というのは、つくづく地域の防人であると認識しました。そのためには消防団にも必要な救助資機材を整えるとともに、人を有効に活用することも重要であると思います。今回、ライフライン施設の復旧に地元の職人が手を貸してくれ、2日間という早期に応急復旧することができました。これは今後活かせる教訓だと思います。活躍できる住民はあらかじめ登録してもらい、災害

時には救援隊を編成し活動してもらおうのです。

震災当日、当市では8件の火災が発生し、そのうち2件は延焼拡大しましたが17、18日の2日間で対処できましたので、19日からは相互応援協定に基づき芦屋市の応援活動に移りました。

消防団員は自ら被災していながらいち早く集まり直ちに消防活動を開始し、消防職員、地域住民と協力しながらこの大災害に立ち向かいました。彼らをかき立てたものは、まさしく地域に根ざした消防団の伝統であり、この大震災を機に改めて消防団を誇りに思いました。

郷土を愛し、郷土を守る消防団



芦屋市消防団長
川合 友一

17日から19日までの3日間で芦屋市には13件の火災が発生しましたが、なんとか延焼を抑えられたのが不幸中の幸いでした。これは消火栓が使用不能のなかで、防火水槽、プール、河川の水、井戸水などを効率よく活用したことと、消防団と消防本部の協力によるものだと思います。

芦屋市は住民のなかに医師が多く、自ら被災したにもかかわらず率先して負傷者の手当てをしてくれました。負傷の程度によってどの病院が適切か、また、この負傷者は頭を動かさないようになどと、非常にきめ細かな指示をしてくれ病院への搬送に役立ちました。

救出活動で忘れられない出来事があります。地震直後、市の西側に位置している清水町で「娘が

下敷きになっている」との通報により現場に駆けつけると、コの字型の2階建てアパートが倒壊しており、若い娘さんが柱の下敷きになっていました。最悪にも正面と背後から火の手が上っており、火勢も強く、要救助者の所まで容易に近づけませぬ。娘さんは「おかあさん、さようなら」と弱々しい声で言い、手を振っています。我々は「今いくぞ。頑張れ」と懸命に励まし、作業服の上から何度も水をかぶって進入を試みたのですが、火勢は強まるばかりで思うようにいきません。すると、おかあさんが「もう行かんでください。行けば共倒れになります」と、我々を遮ったのです。

今回の震災を通じて、消防団は火を消せばいいというものではないということをつくづく知らされました。人命を救出するのも消防団の使命です。そのためにはチェーンソーなどの救助資機材は必要で、その訓練もしなければならぬと思いました。

本市は尼崎市、西宮市、伊丹市、川西市、宝塚市、三田市、猪名川町の7市1町で災害時における相互応援協定を結んでおり、緊急時には相互に応援することになっています。今回の震災では19日から尼崎市、宝塚市ほかの消防団の協力のもと、人命検索（ローラー作戦）を実施しました。芦屋市の約3万3,000世帯を1軒1軒調べて回り、未救出者がいないかどうかの確認作業を行いました。自らが被災者であるにもかかわらず応援に駆けつけていただき、改めて消防団の結びつきの深さを感じました。とても感謝しています。今後はよりいっそう7市1町の結びつきを深め、地域の連携を強めたいと実感しました。また、震災発生直後から、自ら被災者であるにもかかわらず自発的に参集した消防団員を誇りに思います。郷土を愛し、郷土を守る消防団の素晴らしさを再認識しました。

野次馬に何度も消火活動を中断される



神戸市西消防団玉津支団副支団長
北井 道男

玉津支団は蓮池小学校前に部署しました。水源の西代プールと筒先のほぼ中間地点で、山陽電鉄と県道（通称・御屋敷通り）が立体交差する場所です。高速道路が倒壊し、県道が通行止めになりましたので、いきおいこの道路に車が集中し、大変な渋滞が生じていました。我々は国道にホースを延長したのでは自動車に破損される恐れがあると考え、ストップしている山陽電鉄の線路に沿ってホースを延長しました。

しかし、そうしたにもかかわらず踏切りでは我々の願いなど意に介さず、ホースの上を走行する自動車が後を絶ちません。破損したホースから水が吹き上がり、そのたびに新しいホースと交換しなければならず、まったく無意味な繰り返しに強い憤りを感じました。送水をストップして、また一からやり直しです。伝令が走っていく間にも新たな箇所でも火の手が上がり、こんなときトランシーバーがあったらはずいぶん助かったと思います。通行する自動車のなかには被災地を見物にきた人もおり、心底、怒りが込み上げてきました。また、燃料切れにも苦労させられましたが、なんとか西消防署と連絡がとれ、トラックで運んでもらうことができました。

団員は1本約5kgもする重いホースを2本担いで走りました。腕は張り、足元は暗く、しかも道は地震のためにでこぼこになっており走りにく

いことおびただしく、それでも皆、必死で消火活動に当たっていました。初めて経験する凄まじい火勢にもひるまず、寒さにも耐え、本当によく頑張ったと思います。ただ、一つ後悔していることがあります。蓮池小学校前に部署していたときに積載車で遺体を運んでほしいと住民から頼まれたのですが、私は消火活動を優先したい旨を話し、その依頼を断ってしまったのです。果たしてそれでよかったのかどうか、住民の気持ちを思うといまだにつらくなります。

重機での掘削作業には細心の注意が必要



津名町消防団長
松本 英志

ドーンという大きな縦揺れがあったとき、関西空港から発着する飛行機が島の上を飛んでいますので、とっさに家の近くに飛行機が墜落したのかと思いました。後で人に聞くと、同じように飛行機が落ちたと思った人が多かったようです。強い横揺れに変わってから地震だということが分かりました。6時20分頃に役場に到着すると、既に災害対策本部が設置してありました。津名町の場合、災害発生時はサイレンによって招集をかけます。この通報によって団員はそれぞれの器材置場に集合し、分団長の指示に従って行動するシステムになっています。団長ら役員はどんな災害時でも役場に出て、指揮を取ることになっていますので、地震発生と同時に役場に急行したのです。

地震直後ではありましたが、電話は使用できま

したので、7時前には町の被害状況が概略ですが掌握できました。今回の震災で不幸中の幸いは、被害が役場周辺の志筑地区と中田地区の2地区にほぼ集中しており、比較的被害の少なかった他の4地区の消防団のうち、いくつかの分団をこの2地区に投入することができたことです。そのために迅速な救出活動ができました。これがもし町全域に被害が及んでいたら、とても今回のような対応はできなかったと思われま

した。地震当日の11時頃にはすべての救出を終了しました。救出に際しては土地柄もあって、近所づきあい普段からあり寝室の場所が特定しやすく、救出が素早くできたという利点がありました。救出作業に威力を発揮した道具としては、まず屋根をはがすためのボールと鳶口でした。これは欠かせません。しかし大きな屋根になりますと、とても人の力だけでは太刀打ちできませんし、瓦を一枚一枚はがしていたのでは効率が悪いですから、どうしても重機が必要になってきます。今回、建設業の人に重機を運転してもらいましたが、普段、建設現場で動かしている場合と人が埋まっているところを掘るのでは、事情がまったく違ってきます。家族も傍らで気を揉みながら見守っています。急がなければと焦る気持ちと、重機で体を傷つけはしまいかという不安で、なかなか重機を動かすのには消防団員が下で確認しながら指示してあげることが必要でした。「引け」「止めろ」といった指示を出すのは、ひとつ間違えれば助かる命を失わせることにもなりかねません。とても勇気と責任の重い役目です。今回、藤岡副団長がその役目を果たしましたが、大変な思いをしたはず

です。淡路島にはため池が2万5,000ほどあります。町内にもたくさんのため池があり、救助後は一つひとつ堤防を確認して回り、亀裂が入っている堤防は修復しました。また、街路灯が倒れて、夜にな

ると町は真っ暗な状態です。他県ナンバーの車が
入り込んで金目の物が盗まれているという流言が
流れ、その夜から消防団は自主的に夜間パトロー
ルを行い、これは3月いっぱいまで実施しました。
また1月22日には大雨の予報が出ていましたので、
管轄のため池を巡回するとともに、必要な家には
屋根に防水シートを張る作業も行いました。

気合いが迅速な救出に



北淡町消防団長
安 啓

今回の震災で本町は38人の尊い命を失いました。
また全半壊、一部損壊家屋は3,120世帯にのぼりま
す。震度7の激震が残したむごい爪痕は、なかなか
癒えるものではありません。この大災害を振り返
ったとき、我々消防団は果たして使命を十分に
まっとうできたかと自分に問うと、口惜しさが募
ります。なかでも北淡町で唯一発生した火災で、
焼死者を1名出したことは無念でなりません。地
震直後の6時16分に通報があり、駆けつけると倒
壊した家屋の1階から出火しており、奥さんが家
の下敷きになっていました。防火水槽から水を取
り、ホース3線で消火に当たるとともに救出も試
みたのですが、柱が重すぎ人間の力だけではとう
てい動かしがたいのです。淡路島では地震よりも
台風にも備えた家づくりをしていますので瓦は重く
し、梁も直径50cmくらいの太い木材を使用してい
ます。これが今回の震災では災いし、1階はつぶ
れ2階がその上にのしかかる典型的な家屋倒壊を
招いたのです。

団員に重機を運んでくるよう指示し、来るまで
の間、懸命に消火救出を試みるのですが、押しつ
ぶされた1階から出火しているため屋根が邪魔し、
思うように火を消せません。8時30分ごろに常備
消防が応援にきてくれ、協力して消火救出に当た
ったのですが、残念な結果となってしまいました。
頼りにしていた重機は10時30分ごろになってやっ
と到着しました。なぜそんなに到着が遅れたかと
いいますと、あのときはどこでも喉から手がでる
ほど重機がほしい状況でした。「下敷きになってい
る。その重機で助けてくれ」と懇願されたら協力
しないわけにはいかなかったのです。重機を調達
にいった団員を、どうしてもっと早く来なかった
と責めるわけにはいきません。この火災例をはじ
め、今回の震災における消火救出活動から各積載
車には刃渡り40cm以上のノコギリとチェーンソ
ー、それにチェーンブロックを装備する必要がある
と痛感しました。

しかしながら、今回の震災を通じて地域に密着
した消防団としてのあり方が、間違いではなかつ
たことを立証できたようにも思います。大災害に
もかかわらず、震災当日に倒壊家屋の下敷きにな
っている被災者をすべて救出し、行方不明者もい
ないことが確認できたのは、日頃から地域住民と
団員のコミュニケーションが円滑に図られていた
からにはほかなりません。北淡町消防団は6分団33
部565名で構成されています。とりわけ、町内会単
位の「部」の働きが大きかったと思われます。本
部から指令が出る以前に自主的な救出活動に入り、
日頃から親しくしている家のことですから間取り
を知っており、無駄な時間を費やすことなく救出
することができたのです。プライバシーがないと
いう指摘もありますが、今回はこの親しみが効力
を発揮しました。同じ町内に暮らす者同士、いい
意味での関心を持つことは、とても大切なこと
ではないでしょうか。独居老人に関しては、台風災

害のときに安否の確認を実施しているため速やかに確認作業が行えました。

18日以降は避難所の支援、二次災害の防止に当たりました。1月の末になってようやく風呂に入れたときは、心底ホッとしました。シートをかぶせていない家はみんな消防団員の家だという、笑うに笑えない話がありました。

地域住民に信頼される消防団



一宮町消防団長
室田 賢一

現在は消防団長をしていますが、震災当時は多賀地区の分団長をしていました。地震直後、すぐに各分団ごとに自主的な救出活動に入ったようです。多賀地区の被害状況を把握した後、役場のある郡家地区の被害がひどいという電話連絡があり、急ぎ50人ほどの団員を連れて町役場に向かいました。途中、伊弉諾神社の鳥居が倒壊しているのを見て、初めてひどい地震であることを知りました。町役場に到着したのは6時30分頃だったと思います。既に郡家地区の中谷分団長（現・一宮町消防団副団長）が救助を求めて駆け込んでくる住民の対応に当たっていました。電話はすぐに回復しましたが、住民は通報するより役場に直接駆け込んでくることのほうが多かったように思います。災害時に役場に集結する取決めはありませんでしたが、被害は市街地に集中しており、自動的に役場が活動拠点になったのです。

集まった団員を10名1チームで編成して現場に

向かわせ救出活動に当たったのですが、当日の昼頃には1件を残してほぼ救出活動を終わることができました。救出の遅れた1件は、夫婦2人で暮らす家でしたが、倒壊した家屋に向かって呼びかけても返事がありません。よく車を利用して泊まりにいていたということでしたが、家に車があったので、それなら家にいるに違いないと思い重機を入れ、丹念に瓦礫を取り除くとようやく1階の隅で圧死している2人を発見できました。今回の震災で重機を使っただけの救出はこの1件だけで、ほかはすべてのこぎりとスコップ、チェーンソーだけで対処しました。しかし、台風に備えて重い木材を使用していますからのこぎりだけでは限界があり、救出活動にはチェーンソーが威力を発揮しました。この事例を最後に15時、行方不明者ゼロを確認しました。

全壊家屋1,032棟、死者10人を出した大災害にもかかわらず、当日のうちにすべて救出できたのは震災後、幾度となくマスコミで報じられたように、どの家ではどこに寝ているかまで承知しているので迅速な救出活動が行えたのです。また、火災が発生しなかった原因としては、一宮町の漁業は海苔が主体のため、起き出すのが地震が起こった時間よりもう少し遅いのです。台所でまだ火を使っていないのが、不幸中の幸いでした。

救出活動が終了してから各分団はそれぞれの地区に戻り、家を一軒一軒見て回り、安全かどうかの確認作業を行いました。夕方からは大半の方が避難所暮らしのため、消防団員で各地区を巡回したり、井戸から水を汲んで避難所に運んだり、頼まれれば倒壊した家から通帳や現金なども取り出して届けるようなこともしました。高齢者は1人で倒壊した家に入れませんが、代わりに取ってきてあげるのです。消防団員はそれだけ地域の人に信頼されている証しだと思います。17日の18時ごろ、町役場の女性職員や地元の人たちが炊き出

しをしてくれ、また近くのコンビニエンスストアからパンの差し入れがあって、ようやく消防団もひと心地つくことができました。

筒先を奪おうとする住民



神戸市西消防団榎谷支団副支団長
平山 寛行

我々の支団は筒先を受け持ちました。消火活動している間は、それはもう大変な状況でした。住民の方に腕をつかまれ、胸ぐらをつかまれ、うちの方から火を消してくれと懇願されるのです。住民の方々の気持ちは痛いほどよく分かります。しかし、言われるままに消火するわけにはいきません。我々は地元の消防団ではありませんから地理にも不案内ですし、何はさておき火の大きなところから消火しようと筒先を向けるのですが、こっちが先だ、いやこっちだと、筒先を奪いかねないほど混乱した状況でした。

困ったのは水がすぐに止まってしまうことです。玉津支団が部署したところで自動車がホースを踏みつぶしていくため、筒先まで水が送られてこないのです。さあ消すぞと意気込むと、すぐに水が出なくなる。そんなことが何度かありました。そのたびに住民の方から激しい怒声が上がります。情けなく、そしてもどかしくもありました。

18時30分ごろに部署し、第2陣と交替した23時ごろまで消火活動を続行しました。交代後にすっかり冷たくなったおにぎりを食べましたが、水と寒さで体は冷えきっているにもかかわらず、そのおにぎりのおいしかったことといたらありませ

んでした。

今回の火災で怖いと思ったのは、隣の住宅に火が燃え移る場合、まるで自然発火のようにいきなりワッと燃え上がることでした。フラッシュオーバーを起こしたのだと思いますが、わずかの間、目をそらしていると、それまで無事だった住宅から激しい火の手が上がるのです。これはとても怖いと思いました。

なんとかその現場は明け方までに鎮圧でき、我々はひとまず西区に引き上げたのですが、戻る消防車の中で空しさばかりが募ってきたのを昨日のこのように覚えています。団員は皆、疲労と無力感で押し黙ったままでした。

住民の要望に応えられる消防団として



明石市消防団長
山崎 忠義

明石市消防団では、ボランティア活動隊を編成し、高齢者の家庭、障害者の方並びに母子家庭の救援活動を行っています。

1 活動内容

- ① 屋根のシート張り
- ② 家具転倒の整理など

※なお、家屋の倒壊や門、塀の修復などはご遠慮ください。

これは1月23日に市全域に回覧した文書の一部です。雨が降りだすと市民が屋根のシート張りに四苦八苦していたものですから、お年寄りや体の

不自由な方、男手のない家庭ではどうしているのだろう。できずに困っているのではないだろうか。そんな心配がありましたから、上記の方に限って消防団がお手伝いすることにしました。

防水シートは市民会館にストックがある程度ありましたが、県の消防学校や三木市のグリーンピアへ出かけ、救援物資の中から380枚ほど集めてきました。残った防水シートは被害のあった工業用ため池に水防用として使用させていただきました。

屋根に上がっての作業ですから、くれぐれも団員にはけがのないよう注意してもらったのはいうまでもありませんが、団員のなかに屋根職人がいて、これは大変助かりました。作業に当たっては4～5名を1組として回ってもらいましたが、1日に回れるのはせいぜい5軒程度。1月末までこの活動を継続しましたが、最終的にシート張りは110件の要請があり、547名の団員が作業に当たりました。ただ、消防団員はそれぞれ仕事を持っています。なかでも会社員の団員は企業の理解が得られないことには活動が難しいですから、私は団長名で協力依頼の文書を送らせていただきました。それとともに「出勤証明書」というものを作成し、ボランティア活動する団員に支障がないよう配慮しました。これは消防団員のためでもあります。企業に防災意識を高めていただく狙いもありました。

今回の震災を通して、私は消防団も時代に即して変貌していかなければならないと痛感しています。消防団だと威張っていられた時代も確かにありました。しかし、現代は地域住民とコミュニケーションをしっかりと、要望を把握して活動を広げていかなければいけない時代だと思います。

本市の消防団はこうしたボランティア活動のほかに救援物資の仕分け活動にも当たりました。1月21、22日の両日は県の消防学校で、2月25日にはグリーンピア三木でそれぞれ活動しました。神

戸市の大火災をみまして、改めて防災上、公園や街路樹などの都市空間というものがいかに大切かを認識しました。今後は都市空間の重要性を見直し、災害に強いまちづくりをしてほしいと思います。

震災の反省から、要請なしでも団員の他府県派遣を決める



姫路市網干消防団長
山田 昇

地震発生直後、被災地では水が不足していると思い、急ぎポリ容器を集めて回りましたが25個しか集まらず、とりあえず9時に団員4名で神戸市へ出発しました。翌日からはポリ容器40個分の飲料水が届けられるようになり、わずかながらでも被災者の喉を潤すことができたのではないのでしょうか。

また23日の14時40分に県消防防災課から直接、私のところに電話があり、24日から神戸市北区にある県消防学校で救援物資の積み降ろし業務に当たってほしいとのことでした。県の要望は派遣人員は50名。期間は1月24日から27日までの4日間です。県も震災の対応に四苦八苦していることは理解していましたので、市消防局に相談し、分団長を招集して24日は我々の網干消防団、25日姫路東消防団、26日姫路西消防団、27日飾磨消防団の各団員50名を派遣することに決定しました。急なことであり、各分団の人員が確保できるまで、とりあえず我々網干消防団が先陣を切ることにしました。

業務は9時から翌朝の9時まで、一昼夜業務です。網干消防団の場合は服装として作業衣、白ヘル、長靴、法被を着用するよう指示し、軍手、タオルを持参するよう伝えました。24日6時15分、網干消防署に集合し、輸送バスに乗って神戸に向かったのです。

消防学校に着いてあぜんとなりました。10t車が40～50台ズラッと並んでいます。これを下ろさなければならぬのかと思ったら足が震えました。わずか50人でこれだけの積み荷が降ろせるだろうか。降ろしてもキチンと整理しておかねばなりません。経験がないものですから、そうした作業が果たして我々だけでできるのだろうか。不安を感じたものの、作業にかかれば全員、必死の思いで働きました。消防学校の校長先生が22時から仮眠をとるよういってくれましたが、そのとき東北6県の車が続々到着したのです。渋滞して到着が遅れたのでしょう。見ていると、運転手が1人で荷降ろしを始めました。我々50名で作業しても大変な重労働です。とても1人では降ろしきれません。おそらく渋滞するなかを眠い思いをして車を走らせてきたのでしょう。東北までは長い道のりです。一刻も早く荷を降ろし、帰りたいのでしょう。そんな思いが痛いほど伝わってきますから、見兼ねて手伝いました。その積み荷を降ろし終えたのは24時を回っていました。全員、口も聞けないほど疲労していました。救援物資の積み降ろし業務はさらに2月26日から28日までの3日間、場所をグリーンピア三木に変えて団員200名を派遣しました。

今回の震災で得た教訓から、兵庫県消防団では他府県で災害が発生した際、要請がなくとも消防団員300名をボランティア活動のために派遣することを決めました。現在、派遣団員は救急救命処置をマスターすべく、講習を受けているところです。

家族の理解と協力を背に活動



山崎町消防団部長
助光 梅代

私は10年ほど前から週に一度ですが、独り暮らしのお年寄りにお弁当を配っています。独り暮らしのお年寄りはだれかと話せることが、とっても楽しみなんです。私もお年寄りが好きですから、喜んで話し相手になってあげるので。

消防団に入ったきっかけも、一部のお年寄りだけでなく、より多くのお年寄りのお世話がしたかったからでした。家の周囲に燃えやすいものを置いていないか。火の始末ができているだろうか。そんなことのお手伝いがしたいと思い、団員にさせていただいたのです。

今回の震災でも困っている独り暮らしのお年寄りが大勢いました。そんなお年寄りのために何か役に立ちたい。でも、家族を放って神戸に行くわけにはいかないと思っていると、逆に家族のほうから「消防団員のくせに何しとる。被災地に行ってやらんか。」とせきたてられ、リュックサックに必要な物を詰め込んでくれたのです。

私は山崎町の自治会が現地で炊き出しをすることになったので、さっそくその一員に加えていただきました。15人でお餅をつき、おしるこを作ったのですが、皆さんにとっても喜んでいただきました。忘れられないのは最初に炊き出しに行った際、きつとまた来るからと約束していたおばあさんがいて、2度目に炊き出しに行きますと、そのおばあさんが私におまんじゅうを1つくださったので

す。でも、そのおまんじゅうにはカビが生えていました。目がすこし悪い方ですから、カビが見えないのでしょうか。世話になったから何かお礼がしたい。でも震災で何もかも失ってしまったから、配給でいただいたおまんじゅうくらいしかあげられないと、大事にポケットにしまっていたのでしよう。捨てられやしませんから大事に家に持って帰りましたが、戻る車のなかで涙が止まりませんでした。

また、山崎町の女性だけで炊き出しをしたこともあります。ただし、このときは自分のことは自分で対処できる方だけにさせていただきました。責任感があって自分を律することのできる方ではなくては、現地に入ってだれに迷惑を及ぼすかも知れません。ボランティアにあって、逆に被災された方たちの迷惑になるようなことは慎まなければなりません。そういう意味で、参加条件のようなものをつけました。一例ですが、トイレがひどい状態なのです。「女性はどこでもいいからするというわけにはいきませんから、紙おむつで用足しすることになるのですが、それが嫌だったら一緒に行ってもらうわけにはいきません」とね。このような事前準備をしていきました。

今回はボランティアの一員としての活動でしたが、今後ますます女性消防団員が増えていくと思います。男女の特性を生かし組織のなかで十分な活動ができるような体制づくりを考えていく必要があるのではないのでしょうか。

大阪府として広域的な救援活動ができたことに誇り



大阪府消防協会会長
(和泉市消防団長)

森 益三

18日、被災地では飲料水が不足しているということを知り、和泉市消防団で被災地に届けるべく市消防本部、市消防団、それに泉大阪ライオンズクラブのご協力を得て、20日8時、1,200個のポリ容器に詰めた飲料水をトラック10台に積載し、ほかに軍手や毛布も積み込み、堀口副団長以下10名で消防団本部指揮車を先頭に長田区役所へ向かいました。途中、一般車両が間に入ったり、また道路が寸断されていたりで何度か緊急走行に支障をきたしましたが、11時頃には長田区役所に到着しました。区役所の要望で飲料水などの救援物資は神戸協同病院及び避難所になっている小学校2校に無事、届けることができました。また、当市消防の敷地内をヘリポートとし、被災地からの重症患者を受け入れ、搬送するなど広域的な応援活動を実施しました。

18日には大阪府の要請により、大阪府消防協会が消防団員による救援部隊を組織して被災地に派遣するため、府内の消防団に参加を求めたことに伴い、本市消防団からは藤原副団長と2人の分団長を派遣することにしました。3名は21日8時30分、「大阪府救援隊」として石津港より船で被災地に入り、同日16時から神戸市北区にある兵庫県立消防学校で救援物資の仕分け作業に当たりました。学校のグラウンドには既に膨大な量の物資が集まっているにもかかわらず、それらの整理がまだでき

ていないため肝心の被災者には届けられていない状況であったといえます。それから翌日の3時まで、救援隊の不眠不休の仕分け作業が始まりました。雨に打たれ、寒さに耐えながらの作業は、なかなか苦勞のいる作業だったと聞いています。

大阪府内でも豊中市など被害の大きかったところがあつたにもかかわらず、それらの方々のご厚意により大阪府として消防団による救援隊を組織し、兵庫県に派遣できたことは、いま振り返ればとても意義のあることだったと思います。万が一にも団員がけがをしたときのことを考えると、派遣することにはためらいもあつたでしょう。しかし、隣県が大災害で苦しんでいる最中に見て見ぬ振りにはできません。こうした緊急時にこそ応援の手を差し伸べるのが消防団の心意気であると思うのです。救援物資の輸送及び仕分け作業などをはじめ、被災地自らでは実行不可能な作業が多々あります。今後、こうした大規模災害が発生した際には、近隣の被災していない地域の消防団が組織的な支援活動をする必要性を痛感しました。今回の震災で得た貴重な体験を通して、我々は地域を守るとともに、さらに広い意味での消防団としていっそう絆が強まったと思います。

大切な救援物資を任されたことは光栄



大阪狭山市消防団長
小林 末好

大阪府消防協会から南河内地区消防団に兵庫県立消防学校で救援物資の搬入搬出作業に当たって

ほしいという依頼があり、1月28～29日、2月11～12日の2回、支援活動に当たりました。

既に震災から11日たっており、学校のグラウンドには膨大な救援物資が集まっていました。品物別に仕分けされており、それぞれ5～6mほどの高さに達していたほどです。この仕分けは、20日に現地入りした大阪府救援隊が行つたと聞いています。そのときは震災直後であり、リーダーも不在のためまったく整理整頓がなされてなく、グラウンドにシートを敷き、その上にあらゆる救援物資がただ山積みになっているような状態だったそうです。下に積まれたラーメンなどは、雨を吸って食べられなくなっていたようです。

消防学校に集められた救援物資は、ボランティアで来ていた運送業者の大型トラック1台に3カ所分の物資を積み避難所に輸送しますが、需要の多い物資はだれもが欲しがり、最初の避難所で大半が持って行かれてしまいます。そのため足りなくなった物資を補わなければならない、トラックは再度消防学校に戻らなければなりません。避難所の方に、ほかの避難所にも届けなければいけないと運転手が説明しても聞き入れてもらえなかったといえます。しかし、それは無理からぬことでしょう。

また、道路事情を考えますと、輸送に関しては大型トラックよりも軽四輪などの小型車の方が有効であったと思います。一度にいくつもの避難所を回ろうとせず、小型車1台で1つの避難所を回る分散輸送のほうが効率はいいのです。2回目で行つた際には、前回に感じたこうした問題点が解消され、物資の輸送はとても円滑に行っていました。情報も行き届いており、いま避難所では何が要求されているかを消防学校も的確に把握していました。

救援物資の搬入搬出作業という支援活動を通して私なりに感じたことは、今回の震災においては

全国の人々から様々な形で支援の手が差し伸べられました。この震災が決して人ごととは思えなかったのでしょうか。我がことのように痛みを分かち合い、実に温かい励ましがなされたことは大変素晴らしいことだと思います。こうした善意を最大限に活用するためには、救援物資の搬入搬出作業におけるリーダーの必要性を強く感じました。また、全国からの救援物資の輸送は市町村などに委ね、個人として車で被災地入りは厳に慎むべきだと思います。反省すべき点は反省し、効率のよい方策を早急に講じる必要があると思われます。

今回の支援活動において、派遣消防団員は地味できつい作業にもよく耐え、頑張ったと思います。そして、貴重な救援物資を取り扱う作業を消防団に任せてくれたことをとても光榮に思っています。

震災直後に消防団員による 救援物資搬送隊を派遣する



八王子市消防団長
浅岡 富男

被災者の数が増加していくなかで、1月19日17時より緊急本団・分団長会議を開催し、八王子市長の特命により市消防団員による救援物資搬送隊を組織しました。ミネラルウォーター1万本、アルファ米1万食、缶詰・弁当3,000食、ポリタンク40個、毛布40枚を4tトラックに積載し、翌20日7時に市役所庁舎前を出発。中央道経由で被災地に向かいました。搬送隊の構成は副団長2名、分団長7名、団員6名、市防災課事務局職員1名の総勢16名であり、車両は救援物資を積んだトラック

1台、水槽ポンプ車2台、人員輸送車1台の計4台です。

20日19時、八王子から12時間を費やして、搬送隊は無事に神戸市役所に到着することができました。災害対策本部から摩耶埠頭倉庫に搬送してほしいとの依頼により、暗いなかを地図だけを頼りに指定場所を探し、休む間もなく全員で搬入作業にかかり、ようやく作業を終えたときには21時30分を回っておりました。

今回の搬送任務は出発前から過酷な任務になることが予想されました。どこまで高速道路に乗って走れるのか、目的地まで到達できるのかなど、極度に情報が不足している状況下において、搬送隊はその場その場で的確な判断を下し、確実に被災地に救援物資を届けなければならないのですから、実に困難な任務といえるでしょう。そうした劣悪な状況のなかでけがもなく無事に救援物資を被災地に届けられたことは、搬送隊全員の力を結集した成果であると同時に、八王子市消防団全員の「自分たちの分まで被災された方たちを応援してきてほしい」という思いに勇気づけられたことも忘れてはなりません。

救援物資の搬送任務に当たった団員からは、その体験から実に有意義な報告を受けました。例えば、被災地では交通が寸断され、人手も不足しているため、救援物資を被災地に直接送るのではなく、被災していない隣県及び市町村に救援物資の基地を設置し、そこから各避難所に必要な物資を搬送すれば交通渋滞も緩和され、避難所ごとに物資が違うというような不公平さも解消できるのではないかと。また、地震の影響でゴミ焼却炉が使用不能になったため、避難所には物資を運んだ段ボール箱が山のように溜ってしまったこと。帰路は空車になる応援車両がこれらを持ち帰り、地元で処分すればよかったのではないかとという報告もありました。団員が懸命に任務を遂行したなかで得

た教訓は今後、市の防災計画に生かしてほしいと
念願しています。

地震に負けるものか！

～当務中隊長として～



神戸市消防局生田消防署
中谷 満

今回の震災を振り返って、第1に思うことはとっさの状況判断が大切だということです。地震発生が朝の5時46分であり、市民にしても、また消防にしても、「寝込みを襲われた」状況だといえるでしょう。その日、当務員であった私はいつもどおり管内巡視のため、5時20分に起床。地震発生前には服装も整えていました。そのときいきなり西からドカーンとものすごい音がして、立て続けに建物全体が下からドン、ドン、ドンと何度も突き上げられ、とっさに隣の生田警察署で爆弾テロでも起こったのではないかと思ったほどです。そして、すぐに強い横揺れに襲われ、これは地震なんだと理解しましたが、建物のあまりの揺れに一時は死を覚悟したほどです。「くそ！ こんな地震に負けるものか！」と心の中で叫びながら、通路を塞ぐ防火戸を必死におさえ、「これは、もしかすると神戸の生田から西は壊滅したのではなかろうか」と思いました。

何とか揺れがおさまった後、私は、直ちに当直職員を集合させ、点呼をとり無事を確認した後、今後の消防活動に備え全員に編上げ靴を履かせ、服装、装備の点検をさせました。また、署内がガス臭いため、爆発の危険を感じ車庫の消防車を押

して外に出させました。

そして、急いで外に出て見ると、土埃が立ち込めるなかに倒壊している家屋が眺められ、町は不思議と静まり返っていました。外に出てきた人達がパジャマ姿で放心したようにふわり、ふわりと歩いている。聞くと、「家族が家の下敷きになってる」。そう告げるものの声が妙に淡々として弱々しく、現実感がないのです。緊急を要するほどの事態であるのに、そのことが当人には、はっきりと認識できていない様子なのです。切迫した声が聞こえたのは、地震発生から30分たった頃だったと思います。

甚大な被害であることを認識した私は、これから消防としてどう対応するかを考え、まず、情報の混乱を防ぐため現場指揮本部を車庫前に設置するとともに、署内に応急救護所を開設しました。また、消火・救助活動は、手つかずの現場をなくすため最小限の人員で隊を編成するとともに、非常招集員を使いひとつでも多くの現場へ出動させ、さらに現場で人手が足りなければ住民に協力してもらうよう指示しました。初めは苦情を言っていた住民も、いったん救助活動を手伝えれば非常に協力的であり、「次はどこや！」と積極的に活動してくれました。また、救助活動に必要な重機も建設会社のご厚意により借りることができ大変に助かりました。それから、住民による救助も多く、署内のあらゆる道具を貸し出しました。このパニック状態のなか、私は直ちに自衛隊の応援が必要であることを実感しました。

生田署の管轄内では17日から19日までの3日間で火災7件、焼損面積約1,700㎡と比較的少なく、31日までに164人を救出できたのがせめてもの救いです。

今回の震災の教訓として、災害時における消火・救助活動は、まず地震から自身の安全を確保したうえで編上げ靴やヘルメットなどの万全な身

仕度、装備が必要であること。また、狭い空間における簡易救助資機材（のこぎり、バールなど）を使っただけの訓練が必要であることを痛感しました。

今回の震災は、早朝に発災したことが不幸中の幸いでした。これがもしあと1時間ずれていたらと思うとゾッとします。最後にひとつ提言させていただきたいことは、ドライバーはいつでも救助活動ができるよう自分の車のトランクにのこぎりやバールなどの簡単な救助資機材を常備してほしいということです。

消防力の不足を市民パワーで補う



西宮市消防局長
岸本 健治

西宮市は震度7という激震に見舞われながら最小限の被害で止められた背景には、固い結束で結ばれた市民の協力と不屈の精神で挑んでくれた西宮消防団員の多大な働きがあったからです。火災発生件数は地震発生から7時までの間に22件、3日間で41件を数えました。このうち再燃火災が6件あり、初期消火が必要であった火災は35件です。その8割の28件については何らかの形で市民が協力し消火に当たったものであり、市民だけで消火に成功したのも4件ありました。消火後、すべての現場を見て回りましたら、ある火災現場では100本もの消火器が転がっていました。みんなで力を集めて何とかこの火を消そうという市民の強い結束が感じられて、改めて感謝いたしました。

西宮市の消防力は、消防力基準からすると「署

所の充足率」54%、「消防ポンプ自動車の充足率」50%、「人員の充足率」57%と、いずれも基準を下回っています。平成6年に26名を増員するなど消防力の増強に努めていますが、消防団を含めた現有消防力は平常時の災害に対応するためのものであると考えています。今回のような大規模災害に至っては、現有消防力では対応しきれません。市民の力が必要不可欠でした。地震直後からたくさんの119番通報を受信しましたが、管制室員は「消防車は全車出動しています。近所の人と協力して対処してください」と応答しています。「消防は待っていてもこない。自分たちの力で何とかしなくては」と市民は非常事態であることを理解し、団結して消火救助活動に当たったのです。市内には自主防災組織、婦人防火クラブ、防火保安協会などが組織されており、日頃の活動を通じて市民は非常に高い自主防災意識を持っています。こうした市民が今回はリーダーとして活躍し、統一ある行動で火を消したのです。

消防隊は「1火災現場に1ポンプ」を基本戦術として投入していきましたが、すべてには対応しきれず、比較的被害の少なかった北部の消防署からポンプ車2台に応援させたのをはじめ、査察広報車など、あらゆる車両に可搬式動力ポンプを積載するなど臨時部隊を編成し、現場に投入しました。

今回、被害を最小限に食い止めることができた要因として、消防団と消防職員の連携が挙げられます。消防職員と団員は日頃からポンプ操法等を通じてコミュニケーションが図られています。本市で一番大きかった広田町の火災現場では、先に消火に当たっていた消防団に2名の消防隊員が合流し、お互い顔見知りでしたからすぐに協力体制をとり、効果的な消火活動が行えました。防火水槽の水がなくなれば土のうで川をせき止めて取水し、その際、水管を国道に通しては車で破裂させ

られるため、とっさの機転で橋の下を通しました。国道に水管を通していたら、おそらくホースにトラブルが発生して現場はさらに延焼したと思われます。消防団は地震発生から3日間は消火救助に当たり、収束の目途のついた20日からは給水活動に移行してくれました。その給水箇所も消防団でなくてはできない、実にきめ細やかなもので、市民にとっても喜んでいただけました。

今回の震災から得た教訓を糧として、必ずや今後の消防に反映していく覚悟です。

人のあたたかさ、地震のむごさ



兵庫県婦人防火クラブ連絡協議会会長
(尼崎市婦人防火クラブ連絡協議会会長)

前澤 朝江

兵庫県及び近隣の婦人防火クラブ員の協力のものと、今回被災された方々へ炊き出しの支援活動に当たりました。炊き出しを行ったのは西宮と神戸の2市。西宮は東エリアのクラブ員（大阪府、和歌山県、愛知県、滋賀県、群馬県、精華町、福知山市、兵庫県）が受け持ち、神戸は西エリア（岡山県、広島県、山口県、兵庫県）のクラブ員が受け持ちました。

寒いですから温かいもののほうが喜んでいただけたらと思います。豚汁を作ったのですが、予想した以上に大勢の人たちが並んだため、材料が足りなくなることがありました。そんなときはクラブ員が近所を駆けずり回って材料をかき集めました。

震災でどこも品不足です。やっと青々とした野菜を見つけたときには、ほんとうに涙が出るほど

うれしかったものです。また「日本盛」さんをお願いしたところ、貴重な酒粕を快く30kgも出してください、私ども一同、本当に感激いたしました。おかげさまで被災された方たちにとっても喜んでいただくことができました。

神戸ではとてもつらい思いをしました。ここでは3,000人ほど並んで、まさに長蛇の列でした。精一杯の愛想を振りまいてみると、袖が象の鼻のようにブラブラした大きすぎるジャンパーを着た小学校2年生くらいの男の子がいて、自分の分だけ持って行こうとしますから、お母さんの分も持って行くように言いますと、「お母ちゃん、地震で死んだんや」と言います。胸が詰まってしまって、その子を元気づけるつもりで「だったらお父ちゃんの、持っていき」そう勧めると、後ろに並んでいた奥さんがその子に代わって、ふた親ともこの地震で死んだと教えてくれました。私はもういたたまれない気持ちで鍋の中からお肉を取ると、これはお母ちゃんの分、これはお父ちゃんの分。二人の分も食べて元気になってよと励ましましたが、えこひいきするなと文句が出るかとも思いましたが、だれもそんな声をあげる人はありませんでした。

今回の地震で親を失った子が随分いるのではないのでしょうか。支援活動が終わってから一人のボランティアとしてその子を訪ね、汚れ物を家に持って帰り、洗ってあげました。頼まれればその子のまわりにいる方たちの洗濯物も預かったのですが、人が多くなったのでだれのものか分かるように色ちがいの糸をくくって目印にしました。

有馬街道から三田に出て福知山線で尼崎に帰ってくる日々が12日ほど続きました。震災の傷が癒え、子供たちがすくすくと明るく育ってほしいと願わずにはられません。

組織のネットワークづくりを



神戸市北区婦人消防隊連絡会会長
藤原 孝子

北区には地区ごとに組織された婦人消防隊が6隊あり、17日の地震発生当日から家のお米を持ち寄っておにぎりの炊き出しを行いました。作ったおにぎりは災害対策本部、消防団によって現地に届けていただきましたが、2月からは冷たくなったおにぎりを提供するより、現地で調理した温かいものを被災した方たちに召し上がっていただく、1日の生田小学校を皮切りに現地炊き出しを実施してまいりました。

炊き出しといえば大人数ですので、慣れないとどのくらい材料を用意すればいいかがつかみにくいものです。今回、何度か現地で炊き出しをさせていただきましたが、さしたる混乱もなくスムーズに行えた裏には、平成元年の「北区婦人消防隊結成記念大会」で行った600食の炊き出しの経験が生かされたのだと思います。現地に入ってから材料が足りなくて右往左往するようなことはなかったと思います。そのかわり被災された方たちは生野菜も欲しがりますので、そして差し上げるととても喜んでいただけるものですから、つついあれもこれもと出しすぎてしまって、気がついたら残りが少ないということがありました。

おにぎりは素手で握ったほうがおいしいですし、こちらの「頑張ってくださいね」という思いも伝わるのではないかと思います、みんなラップなど使わず手を真っ赤にさせながら一生懸命、握りました。

現地での炊き出しで心掛けなければいけないことは、「やってあげている」という態度や言葉づかいです。こうした態度が被災した方たちにちょっとでも伝わりますと、反発されてしまいます。私たちは「一緒に頑張りましょう」という言葉を添えて手渡しました。

今回の震災ではライフラインは途絶え、情報も不足しました。とりわけ情報不足が痛手だったと思います。これからも神戸に限らず、いつでもどこどの町が災害に見舞われるかもしれません。そのとき速やかに支援の手を差し伸べられる、あるいは協力して支援できるネットワーク作りが必要だと痛感しました。いま、そうした反省から同じ兵庫県内の佐用郡婦人防火協議会と交流を図っています。こうしたネットワークが兵庫県全域に広がることを願っています。ちなみに1,000食分の材料は次のとおりです。

- おにぎり＝白米80kg
- 豚汁＝味噌23kg、大根35本（約35kg）、豚肉15kg、にんじん8kg（約30本）、ちくわ50本、コンニャク40枚、油揚げ40枚、その他白菜、ゴボウ、里芋、サツマ芋、ネギなど各10～20kg
- ぜんざい＝小豆24kg、白玉粉18kg、砂糖19kg

企業と住民が一致協力して延焼を防ぐ



三ツ星ベルト株式会社専務取締役
松本 徳義

長田地区は普段から火災の多い地区でありますので、可燃物を多く扱う当工場としては地域保全

の目的から、火災に細心の注意を払ってきました。また、長田区防火協会の理事を務める当社会長の自社工場から絶対に火を出してはならないという固い意志のもと、従業員への火災に対する啓蒙を行うとともに工場内に自衛消防隊を組織して、火災の予防、消火訓練及び全社員による避難訓練を定期的実施しています。こうした実績から防災意識の高い企業として以前から高い評価をいただいています。

当工場の従業員はしたがって自衛消防隊に入っていないなくても最低限、消火器は扱えますし、消火栓の取り扱いもできるよう訓練されています。実際、自衛消防隊は過去10年間に工場外でも7回の出動経験があります。また、男子社員は出張などで外出しがちですから、女子従業員の消火訓練にも力を入れています。さらに3年前からは全従業員が応急手当てをマスターすべく、神戸市主催の講習会に参加しています。

地震発生直後、「家(工場東側の住宅)が火事でどんどん燃えている」と住民が駆け込んできたので、直ちに夜間勤務に就いていた従業員2人でポンプ車(可搬式手押しポンプ車)を出動させました。工場の地下水槽から水を取り、ホースを延長して消火活動に入るとともに、ほかの従業員も応援に駆け付けて、さらにもう1台のポンプ車を出し、こちらは市の防火水槽から水をとって消火に当たりました。消火活動中、送水でパンパンに張ったホースを移動させるのは大変な作業です。そのために1本のホースを従業員と地元住民とが協力して移動させ、それこそ必死で消火に当たったのです。眺めている人などなく、女性も一生懸命ホースを引っ張ってくれたり、自分の家からバケツを持ってきて、ホースから漏れた水を汲み消火に当たるなど、住民と企業が一体となってあの大火災と格闘したのです。その結果、隣家への延焼は拡大せずに消火することができました。

今回の震災で幸運だったのは、工場内にある井戸を消火水利としての整備を終えていたことでした。工場内には工業用水として200tの地下水槽が設置してありますが、これだけでは水利不足と考え、工場内にある井戸を昨年10月、5kg/cm²の圧力で水が出るよう整備した矢先のことだったので。今回、この井戸は実際に6時間使用でき、しかも不思議なことにすぐまた満水状態に戻っていました。この井戸がなかったら、この地区の火災を鎮火させることは不可能だったでしょう。

その後は当社の体育館を避難所として開設し、400名ほどの近隣住民の方に避難してもらい、震災当日から炊き出し活動を実施しました。これは5月のゴールデンウィークまで開設していました。この大震災で自社も被災し大きな被害を受けましたが、あとから「その節はどうもありがとうございました」と住民の方から声をかけていただくなど、地域に貢献できたこと、住民との絆が深まったことのほうが何よりも嬉しいことです。



婦人消防隊にいたからこそ 大きな力に



神戸市北区道場婦人消防隊隊長
山元 恵美子

私たちの町は幸いにもさしたる被害はなく、すぐに電気も復旧しました。しかし、テレビに映し出されている神戸の街は、身の凍るような惨状でした。のんびりテレビなど見ている場合ではない。婦人消防隊として被災された方たちに、また現場で懸命に消火救助活動している消防隊の方たちのために炊き出しをしようということになり、急ぎ準備を始めました。小学校のPTAにも声をかけますと、ぜひ手伝わせてほしいという女性が大勢集まり、町全体がひとつになった気がしました。それぞれお米を持ち寄って、ご飯を炊き、みんな心の中で「頑張って！ 頑張ってね」と祈りながら握っていたと思います。園児・児童の励ましのメッセージと折り紙をおにぎりに添え、北消防署を通じ避難所へ送っていただきました。後日「力になりました」という返事が小学校に届いたときは、無性にうれしかったですね。

3月13日にはぜんざいを出しました。北区は農家が多いですから小豆の蓄えはありますので、集めてみたら30kg近くにもなりました。分担して前日に圧力ガンで炊いておき、翌日現地に入ってから水を入れ砂糖を入れ、希望に応じて白玉粉かおもちを入れてあげるのです。お年寄りはおもちがのどにつかえやすいので、どうかと思いましたけれど、おもちがいいとおっしゃる方が実に多いです。ゆがいてお出しするんですけど、おもち

の注文が圧倒的に多いので、なかなか追いつかないということがありました。

現地で炊き出しをするときは華美な服装は慎み、化粧は控えるよう全員で申し合わせました。困ったことはトイレの問題です。炊き出しをするということはその分、避難所を汚す人が増えるという事実があります。被災された方たちを支援するという情熱だけではボランティアは成立しないのではないのでしょうか。する側に相手の気持ちを察し、負担をかけない努力を払ってこそ成立するのだと思います。一人ひとりではたいした力になれませんが、こうして婦人消防隊に入っていたからこそ組織だった支援活動に参加できたのだと思います。

消防団に支えられた炊き出し



神戸市北区淡河婦人消防隊隊長
小西 博子

2月になって現地で炊き出しをすることになりましたから地域の隊員の人たちにそう言いますと、みなさん段ボール箱にいっぱい野菜を持ってきてくださいました。豚汁にする材料は前日に切ってお用意していたのですが、いただいたそれらの野菜を積載車に積みますともうそれこそ山のようでした。でも、そんなにたくさんあった野菜も、避難所の近くを回りましたら15分か20分くらいで、アッという間になくなりました。あのころは新鮮な生野菜がまだ十分でない時期でしたから、本当に被災された方たちに喜んでいただけました。涙を流して喜んでくださるものですから、次の炊き出

しには家にあるもの全部かき集めるようにして持っていったりしました。

現地で炊き出しをしていますと、なかには家に動けないお年寄りがいるから、おにぎりをもうひとつもらっていけないかしらとおっしゃる方もいます。そんなとき、「1人2個に決めてますからダメです、また後ろに並んでください」とはとても言えません。被災された方たちのことを思ったら、差し上げるのが私たちの務めだと思います。足りなくなりそうなら、またお米を持ってきて炊けばいいくらいの気概を持って、精一杯、支援活動をいたしました。

今回の震災を顧みますと、各家庭で3日間は何とか食べられるだけの食料を、普段から用意しておくことがとても大事なんだということを知りました。いままでは何かあったら裏の畑に行って野菜をひっこ抜いてくればいいや。そう安易に考えていましたけれど、災害は予測できない事態が生じることを痛感しました。また、炊き出しについても消防団のバックアップがなければできなかったと思います。積載車で材料の収集に回ったり、長田消防署や区の災害対策本部へ作ったおにぎりを搬送していただいたり、とてもスムーズに支援活動ができました。常日頃、消防団との連携を図り、理解を得られたからこそ実現できたことだったのではないのでしょうか。



災害時にはポジティブな情報を



六甲アイランド病院救急部長
切田 学

六甲アイランド病院は約250床の総合病院であり、通常、医師36名、看護婦約240名が勤務しています。地震発生時は六甲アイランド内の自宅におり、まず家族の無事を確認してから急ぎ、病院へ向かい、6時20分ごろに着きました。

既にけがをした島内の人たちが20人ほど救急外来に来ており、自宅から持ってきた懐中電灯で傷の程度を確認しながら、患者に処置優先順位を示す赤や黄色などのトリアージタグ、これは中華航空機墜落事故を契機に自製したのですが、これを付けてもらいました。7時ごろ、DOA（心肺機能停止状態）の患者が1人運ばれて来たのを機に、それから1時間の間に立て続けに7人のDOAの患者が運ばれてきました（最終的にDOAは9例）。すべて島外から運ばれた患者であり、六甲大橋が通行可能であることを知りましたが、不思議と救急車が来ません（17日は12時ごろと21時ごろの2回のみ）。救急隊員の多くは六甲大橋が落ちた、あるいは通行不能と思ったのでしょうか。水道、電気、ガスなどのライフラインは途絶えましたが、電気は17日の17時ごろに回復しました。

当日の参集状況は医師20数名、看護婦100名ほどであり、この人員で165名の救急患者の診療を行いました。この医療スタッフでは、間違いなく診療できるぎりぎりの数だったと思います。X線、超音波、血液検査ができない状態でしたから、スタ

ッのだれもが手術を要する重症患者は受け入れられないと感じていました。こんなときだからこそ、1人でも多くの患者を診てあげたい。しかし、検査、高度医療機能を失ったという現実。その狭間で多くの医師が、看護婦が強いジレンマを感じていたと思います。

4日目の20日の夜、大阪市立総合医療センターから患者を受け入れるとの連絡が入りました。「重症であろうと軽症であろうと、どんどん送ってください。ヘリポートがありますから、ヘリコプターで搬送してください。責任もって処置します」その言葉にどれだけ勇気づけられたことか。大病院のバックアップが得られると分かったときの安堵感。とても心強く感じられました。

今回の震災で強く感じたことは、どこそこの病院は倒壊した、機能していないという情報は入ってくるのですが、機能している病院、受け入れている病院の情報がありませんでした。緊急時にはネガティブ（否定的）な情報だけでなく、そうしたポジティブ（肯定的）な情報こそが望まれると思います。また、医師全般にいえることだと思いますが、災害医療の知識と技術をもっと認識し、学ぶ必要があるのではないのでしょうか。ヘリコプターによる搬送訓練やその要請の仕方などは、いざという時のためにぜひ事前に訓練しておきたいものです。あわせて広く住民に応急手当を普及し、災害医療の概念を認識してもらう必要があると考えます。

今回、最も恐怖を感じたのは、2日目の18日に六甲アイランドから北西に約500mほどしか離れていないLPG（液化石油ガス）タンクでガス漏れが発生し、爆発の危険があるため周辺住民に避難勧告が出されたときでした。ガス爆発は免れ、避難勧告は解除されましたが、外部医療スタッフの応援もなく、十分な情報もないため、この時ばかりは孤立感が募り、不安な1日を過ごしました。

被災地内における医療拠点として



神戸大学医学部付属病院救急部長
石井 昇

地震発生直後、私は車で病院に向かったのですが、カーラジオで神戸西市民病院がひどい損壊を受けていること、ポートアイランドの神戸大橋が被害を受け通行止めになっていることを聞き、大災害時に医療拠点として機能すべき神戸中央市民病院が機能できないのではないかと察知しました。今回の震災では情報網、交通網がほぼ寸断されてしまい、医療の面でもこうした状況に大きな痛手を被りました。緊急を要する患者を運びたくとも道路はひどい渋滞ですし、情報が乏しいですから、どの医療機関が機能しているか、逆に機能していないかつかめないので。神戸市衛生局でも情報収集が遅れたのではないのでしょうか。

地震発生の翌18日の9時、病院内各部代表者が集まって緊急会議を開き、今後の患者の受け入れ体制についての審議をしました。建物には大きな損傷はなく、医師や看護婦などのスタッフも何とか確保できました。ライフラインについては、電気は地震発生後、停電したため自家発電に移行してその後通常の状態に復帰しました。水は断水しましたが給水タンク分で夕方まで賄い、当日の夜給水車や近隣の病院から救援物資が届いて何とかしのぎましたが、ガスは止まったままでした。したがって、診療検査機器もX線単純撮影、CT撮影、緊急の血液生化学的検査一式が使用可能であり、また3つの手術室が使用可能であることから、

病院として十分機能しうると判断しました。また、救急患者を可能な限り受け入れるため通常の外来診療は休止し、ここが被災地での医療拠点となって1人でも多くの負傷者を受け入れ、治療する責任があると考え、救急診療に当たることにしたのです。

しかし、いまにして思えばもっと多くの患者を処置できたのではなかったろうかと反省しています。当院ではまだ患者を受け入れられるのに、その情報を外部へ有効に発信できなかったのです。そのため規模の大小にかかわらず、一部の医療機関に患者が殺到し、適切な治療ができなかったのではないのでしょうか。また、救護班をつくって診療所や避難所などに支援に回ることもできたはずですが。こうした大規模災害時には情報の発信と伝達システムの構築、また確実な設備の整備が必要であることを痛感しました。さらに、被災地が全く機能していないことを前提とした支援体制、特にヘリコプターの活用も必要であることが分かりました。神戸大学付属病院はよくやったと評価していただいています。私個人は悔やむことが多々あります。

自分の目で現場を見て何が必要かを判断することが大切



(当時)神戸大学医学部付属病院看護部長
新道 幸恵

看護部長としての立場から今回の震災で絶えず念頭にあったことは、自分たちも被災したにもかかわらず、それでも看護に当たらなければならな

いナース（看護婦）たちに、いかに気持ち良く働いてもらうか。その一点に尽きます。なぜかといえば、ナースたちが辛さを顔に出していたらケア（治療）になりません。ナースの笑顔が被災した患者さんたちのケアにつながるのですから、私の仕事は彼女たちが全精力を傾けて働けるようバックアップすることであり、そのための人的、物的支援に全力を尽くしました。

地震発生当日、当院では約400名弱の救急外来がありました。これは通常ですと1カ月に引き受ける数なのです。ライフラインも途絶えていましたから、看護以外の仕事、例えば病院内の掃除からベッドメイキングまでナースが一手に引き受けてやりましたし、地下にある布団をエレベーターが使えないものから階段で運ぶというような力仕事も随分してもらいました。

ナースたちも家のこと、家族のことが心配でしょうから、もちろん帰ってあげたいのは山々なのですが、病院に出てきたナースを帰したら、翌日また出て来られるかどうか分かりません。後で思えば随分残酷なことをしたと思うのですが、全員残ってもらい、継続して業務についてもらいました。問題は宿泊する場所ですが、会議室を2つ空けてそこをナースの仮設宿泊所にしました。

緊急事態ですから、しばらくはナースには無理をいい、我慢してもらってしのぎましたが、いつまでもそうした状態で働いてもらうわけにはいきません。できることは改善して負担を軽くしていかなければなりません。1つには通勤の問題。毎朝3時ごろに起き、4時間かけて歩いて通うナースがいました。地震当日、12時間かけて歩いてきたナースもいます。いつまでも彼女たちに無理を強いるわけにはいきませんから、院内会議の席でシャトルバスを出してもらえるようお願いしました。朝と夕に新神戸、板宿、須磨、西宮から出ることになり、ずいぶん通勤が楽になりました。も

う1つは勤務状態のこと。もう、とうに限界にきていましたから、なんとしてもナースを休ませてあげたい。そんなときボランティアの申し出がありました。しかし、ナースならだれでもというわけにはいかず、仕事内容をその都度指示しなければいけないようでは逆効果です。そこで、とてもオリエンテーションはできないと初めに話しておき、臨床経験5年以上の人という条件をつけて派遣していただくことにしました。

今回の震災のようにマニュアルがないときには自分の目であらゆる現場を見てその都度判断をし、解決していくことがとても大切だと思いました。現場を見て、いま何が必要なのか。そのためにはどうすればいいのか。きちんと自分の目で見て指示を出すことがとても重要なことだと痛感しました。

国民一人ひとりが応急手当 でのマスターを



兵庫県立西宮病院救急医療センター部長
小林 久

今回、阪神大震災を体験した一人の医師として、私はこうした大災害時の対応策として、次の4点を挙げたいと思います。

- ① 基幹の救急病院間及び消防機関との間にホットラインなどの通信網を設置すること。
- ② 医療スタッフと医薬品を完備した広域ヘリコプター搬送システムを確立すること。
- ③ 災害時に備えて医療品の備蓄と迅速な補充体制を実現すること。

- ④ 避難所にいる重症患者の搬出と救護活動を早期に開始すること。

通信の手立てが失われると、我々は全く無力に陥ることを今回の震災は教えてくれました。私も地震発生から2時間後の8時前に当院に着き、大阪の救命救急センターに電話をかけたのですが、午前中は全く通じませんでした。もちろん、被災地のなかでも電話は通じません。孤立無援の状況であると理解し、個々の病院で対応せざるを得ないと覚悟しました。

今回、緊急に救命処置を要する挫滅症候群が多発したにもかかわらず、各医療機関は診療機能が著しく低下し、救急医療活動に限界が生じていました。大渋滞している道路事情を考慮しますと、こうした状況下ではヘリコプターによる搬送が最も有効であると考えられます。当院では挫滅症候群の患者が9名運び込まれ、そのうち6名をヘリコプターで搬送することができ、一命を取り止めることができました。特に17日には骨盤骨折、挫滅症候群でショック状態の患者を当院からヘリコプターで大阪大学病院に搬送でき、これは17日で唯一の搬送例となりました。

また、これは20日に避難所で診察したボランティア医師から聞いた話ですが、避難所にも入院しなければならない患者がかなりいたということです。そうした患者の多くは自分よりもっと悪い人がいると思って我慢をし、医師が来てくれて初めて診察を希望したとのことでした。今後は避難所にいる患者への迅速な救急医療活動も重要な課題であると認識しました。

より根本的な対策として一点、提案させていただきますと、自動車免許の取得に際して、人工呼吸や心臓マッサージなどの応急手当での習得が義務づけられるようになりましたが、大災害時にだれもが適切な処置をできるよう、またより広く国民に習得してもらえるようにすべきであると思

ます。より高度な救急医療を考えると、救急救命士に医療行為を認めるなどして、早急に救命率を高めていく方向に進む必要があると思われます。

今回、特に印象深かったのは、消防団が一生懸命、患者を次々搬送してきたことです。当院ではこれ以上引き受けられないと告げても、何とかしてほしいと必死の形相で頼み込んでいくのです。一人でも多くの命を助けたいという、彼らの熱意に胸を打たれました。

大切なことって、なんだろう



神戸大学医学部付属病院
集中治療部副看護婦長
小田 千鶴子

震災前日が当直明けでしたので、長田区の自宅で地震に遭い、しばらくして起きた近所の火事で、私の家も焼けてしまいました。長田が次々に燃えていくのを見て、これは大変なことが起こったと思い、急いで病院へ向かいました。

歩いて行きましたので、病院に着いたのは朝8時ごろでした。救急外来も受け持っていますので、初めはそちらへ行きましたが、そのとき既に外傷を受けた患者さんが廊下にもあふれているような状態でした。救急外来の処置室の中には亡くなられた方もいましたし、2人同時に蘇生を受けているような状況でした。処置室の外には頭や腕に外傷を負った人が待っており、大けがをしている人が多かったのですが、患者さんたちはパニックになるようなこともなく、むしろ整然といった感じで静かに治療を受けていました。

とはいっても17日の救急患者は400人近くもいましたし、そのうち67人が入院したのですから、病院の中は非常に慌ただしく、混乱もしていました。病棟の看護婦も救急に集まってもらい、看護婦全員が救急外来に集まったような観がありました。当直の看護婦は病院がそれほど損壊していませんでしたから、ひどい外傷を負った患者さんが次々に運ばれてくるのを見て、ひどくショックを受けたと思います。

看護婦のなかには部署の違いから勝手に分からなくて戸惑った人もいたと思いますが、だれかに尋ねて煩わせるようなこともなく、自分で考え、判断して行動していたようです。決してスムーズに働けたというのではないのです。慣れていながらもこれまでの経験をすべて生かして総動員して、一人ひとりが一生懸命に働いた、そんな印象を強く感じました。

DOA（心肺機能停止状態）の患者さんが多く、私はほとんど蘇生の介助に当たっていましたが、治療を待っている患者さんがたくさんいるので蘇生の可能性が低い患者の処置をやめるときに心を痛めました。また、次々に運ばれてくる患者さんに対応するので精一杯でしたから、身元確認まではどうしても手が回りませんでした。これは反省点だと思います。でも、あのときは本当に患者さんの処置に追われるばかりでしたし、患者さんを運び込む人が必ずしも家族ばかりとは限らなかったのです。どこのだれとも分からないけれど、救出し、病院へ運び込んだのですから。

個人的なことをいいますと、私は好きで看護婦になったのですから、今回の震災で1人でも多くの被災者のために全力で看護に当たれたことを、とても嬉しく思いました。人からよく「大変だったわね」と言われますが、少しも苦勞だなんて思いませんでした。

また、私自身も家をなくすなど、この震災で様々

な体験をしました。そのせいか価値観まで変わったと思います。家や家具や大事にしていたものなんて、アッという間に焼けてなくなってしまうんですね。でも、家族は無事でしたし、仕事もあります。物はなくなっても人間なんとかなるものなんだということが分かりました。これまで少しせいたくだったような気がしています。

救援物資の輸送はまず被災地に打診してから



日本赤十字社兵庫県支部事務局長
荻野賢治

日本赤十字社は緊急災害時においては医療面とともに救援活動の拠点としての役割を担っています。今回の震災においても救援物資が被災地へ輸送されてくるのはとても早く、17日の夕方から10tトラックで東京本社及び企業から水、清涼飲料水、食料品などが私どもの兵庫支部に大量に届けられました。

しかし、前例のない大災害の上、関西には地震がないという油断があったため、救援物資の受け入れ態勢が全く未整備な状態でした。トラックが支部の建物に横づけされて大量の物資が道路上に積み上げられるのですが、これを被災された方たちに向けて適切に搬出できるまでにはしばらく日数がかかりました。混乱の原因を考えてみますと、1つには人員の不足が挙げられると思います。事務局には30人の職員がおりますが、当然職員も被災者であり、また全員で物資の整理にかかっているわけにもいきませんから、輸送してくれる都道

府県の救護班に届いたものをそのまま避難所へ輸送してもらうような状況に陥りました。しかし、初めはその応援部隊も地理が分からないため輸送作業に手間どってしまいました。

17日当日と、翌日まではそれでも良かったのですが、3日目ともなりますとさすがに物資にだぶつきが生じてしまいます。被災者の「なんだ、また同じものか」という苦情も聞こえてきます。山と積まれた物資を仕分けする作業は、限られた人数ではとても対処しきれません。東京の本社に情報拠点になってもらい、いま望まれている物資と数量をファックスで伝えるのですが、連絡が密にいかないこともあって望みどおりの物資が手に入らず、逆に差し迫って必要ではない物資が大量に届くというような状況も多々ありました。

また、雨が降れば物資がいたみますので保管場所にも苦慮させられました。運よく21日から中央労働センターに置かせてもらえることになり場所の確保はできたのですが、道路から奥まったところにあるため10tトラックでは出入できず、そのためいったん小型車に積み替えるという余計な手間が生じ、1台のトラックに積み込むのに2時間から3時間かかってしまいました。海運会社からフォークリフトを貸していただき、それで作業できるようになったときは、時間と労力がいっぺんに解消でき、本当に助かりました。

このような状況下では被災地では何が望まれているかを正確に伝達することが、なかなか難しいことを今回の震災は教えてくれました。過去に例のない大災害でしたから、救援物資ひとつとっても大混乱をきたしたわけですが、これを良い教訓として物資の支援体制をきちんと整備する必要があることを痛感しています。一つには被災地に何が欲しいかを打診することが大切だと思います。なにもかもいっぺんに送られると、その処理が被災地の負担になり逆効果です。また、被

災地は機能していないという前提で、被災していない隣県が支援活動のリーダーシップをとるのがベストであると思われます。さらに血液の輸送など、緊急時に交通渋滞のなかを支障なく走行できるオートバイを活用した「赤バイ」の存在は、大変貴重です。今回、この赤バイがなかったことが悔やまれます。

被災者の生活と学校教育の狭間で



(当時)神戸市立生田中学校長
和田 耕次

今回の震災で学校が避難所として活用されましたが、校長という立場から私は2つの点に苦慮しました。一点は避難所での生活をいかに円滑にしていけるかということ。もう一点は学校ですから当然、生徒のこと。とくに3年生は進路の問題が差し迫っている時期でしたから、なおさらでした。

震災当日、神戸生田中学校には約800人(夜になると1,000人になり、翌日は1,300人。一番多いときで21日の2,200人)が避難してきました。初めは体育館を開放していましたが、体育館は500人も入れば一杯ですので、以後は空き教室や格技室も開放して対応しました。しかし、避難所として被災者を受け入れなければならない反面、授業を再開する際の教室を最低限、確保しておかなければなりません。その狭間で随分苦慮しました。

また、非常時とはいえ弱い立場の人たちへの配慮を忘れてはいけません。お年寄りが2、3階にいたのでは階段の上り下りが大変ですし、病人も

います。なかには生後1週間ほどの乳児を抱いたお母さんもいました。こうした人たちの負担を幾分たりとも軽くしなければなりませんので、特別に部屋を用意し、乳児にはいつでもミルクが作れるように電気ポットを置いたりなどしました。

ほかの学校では校長先生自ら避難所の運営に当たったところもあったようですが、私は自治会組織に運営をお任せするのが良策であると考え、もっぱら避難所の環境面に気を配るようにしました。例えば、冬ですからどうやって寒さをしのいだらいいか、あるいは水をどう供給するかなどのことに腐心していました。また、先生方には授業の再開を念頭に置き、避難所の運営の補助をお願いしました。しかし、先生方も被災者ですから、自宅の心配のほかに避難所のこと、さらに生徒が無事であったかどうかの確認のために毎日方々の避難所を駆けずり回り、大変な苦労があったと思います。その結果、生徒1人の死亡が確認されました。1月23日に3年生への補習授業を再開し、2月1日に正式に全校の授業を再開しましたが、以前から「新しい教育とは自ら学ぶ力をつけることだ」と教えてきましたので、「とても勉強のできる環境にないけれど、いまこそ本校の教育が試されるときだ」と生徒を励ました。

避難所で特に印象深かったのは、消防団の活躍ぶりです。運営組織のリーダーとなって、円滑な避難所運営に尽力されたり、プールの水を高架水槽に上げトイレを使えるようしてくれました。また、応援隊車両の先導をするなど、実に精力的に働いてくださいました。消防団組織が都市部でも脈々と生きていたことを再認識するとともに、大変心強く思いました。

一人ひとりの消したい気持ち がバケツリレーに



神戸市長田区西代戸崎自治会
連合協議会副会長

三宅 仁

簡単に位置関係を説明しますと、長田区の戸崎通と西代通の周辺は基盤上になっており、右上に戸崎通2丁目、左上に戸崎通3丁目、右下に西代通3丁目、左下に西代通4丁目があります。丁目の間には約7mの市道が走っています。また、戸崎通の北には山陽電鉄が走り、西代通の南側には国道神戸明石線が走っています。

地震直後、西代通4丁目から既に火の手が上がっていました。しかし、そのときはまさかこんな大火災になるなどは想像もしていませんでした。運の悪いことに電気が復旧し、その際に火災が発生したケースもあったようですし、漏れていたガスに引火したケースもあったようです。そうしたことが重なり、時間の経過とともに火災は北上し、また西の方からも火の手は迫ってきており、その日の午後5時すぎでしたか、とうとう戸崎通3丁目に火は燃え移ったのです。我々はなす術もなくただ火が燃え広がるのを眺めているだけでしたが、しかし、このままではいけない。倒壊した家屋の下には、まだ埋まっている人もいます。何とかしなければ。そんな気持ちが町内の住民のなかに広がって、自分たちでこの火事を何とかしようと気持ちが一つになったようでした。

消火栓をひねっても水は出ませんでした。だれかの声で近くに防火水槽があることに気づき、重い蓋をこじあけると水が入っていました。住民が

それぞれバケツなど持って集まり、ロープの先にバケツをくくりつけ、一人が中の水をすくい次々にバケツを渡していったのが、やがてバケツリレーとなったのです。最初は5～6人で始めた作業も最後には総勢200人ほどになり、燃え上がる戸崎通3丁目の消火に当たりました。そのとき、みんな必死でした。声を枯らして通行人に協力を呼びかけたりもしました。随分たくさんの人が集ってくれました。そのなかには既に焼け出された人や町内とは縁もゆかりもない人もいて、力を貸してくれました。うれしかったですね。あとになって分かったことですが、防火水槽から水をすくっていた方は若いお母さんでしたが、3時間ほど、たった一人で水を掻き出していたのです。これにはみんな驚くとともに、とても感動させられました。

また、こんなこともありました。生き埋めになっている倒壊した家屋に火が移りそうだったとき、その家屋の南側にあった米穀倉庫の持ち主が、まだ焼けてもいないのに倉庫を倒そうと決断されたのです。屋根にロープを掛け、50人ほどで綱引きの要領で引き倒しました。そのお陰で生き埋めになっていた人は、亡くならずに済んだが焼かれずに救出されました。

こうした人と人の結び付きがあったればこそ、非常に初歩的なバケツリレーであの大火に立ち向かうことができたのだと思います。それまで知らん顔だった人も、あのバケツリレーからは会釈を交わすようになりました。大変な被害をもたらした震災でしたが、唯一喜ばしい点は、そうした人と人の心の結びつきが深まったことです。この自治会も震災前は100軒ありましたが、現在は30軒余りで、活動は休止しています。しかし、徐々に戻りつつありますので、平成8年春には再開したいと思っています。

神戸商船大パワーで100人以上を救出



(当時)神戸商船大学白鷗寮自治会会長
有田 俊晃

ものすごい揺れを感じて目が覚めました。寮が停電してしまい、これは大変なことになったと直感し、急いで中庭に寮生を招集させ人員点呼をしました。連休明けのため約250名ほど集まりましたが、幸い寮生にけが人はありませんでした。しばらく中庭で待機してましたが寮棟も無事であったことから一時解散、居室待機としたところ、「家の下敷きになった人がいる」と叫んでいたので一緒に行ってみると、驚きました。いつも買物に行く近くの三和市场が倒壊していたのです。数人の寮生が寝間着姿のまま救出に加わろうとしたので、そんな格好では危険なのでいったん寮に戻り、作業服、安全靴、防寒服、軍手を着用し、それに懐中電灯を用意して随時、報告をするよう指示を出し、現場へ向かわせました。また、救助のための道具は寮のものだけでは不十分だったので、消防署に行って借りてくる指示もしました。これが白鷗寮生の救出活動の発端です。

救出活動に当たる際には、単独行動だけはいないようにとだけ言いました。そのほかの細かいことはみんな航海実習で体験していますので、いちいち言わなくとも分かっているはずなのです。はじめは市場での救出活動に没頭していましたが、被害は広範囲にわたっていることが分かり、組織的な救出活動の必要があると思いましたので、私はいったん寮に戻りました。学生当直室を本部と

し、自治会役員を招集し、会議を開いて様々な役割分担を決めました。また、近所の被災された方たちのために寮を避難所として開放することにしました。慌ただしく準備をしている間にも、救出を求める人が何人も駆け込んできました。その都度、寮生に招集をかけて現場に向かわせた結果が、何人もの人を救助したことにつながったようです。しかし、寮外で生活している友人の安否を確認しにいていた寮生から悲報が告げられるなど、随分辛い思いもしました。商船大学では5人の犠牲者が出てしまいました。

また、甲南病院と芦屋市立病院が機能していると聞きましたので、救出したけが人を寮生の車で病院へ運んだりもしましたが、幹線道路は大渋滞のうえに細い道はいたるところで倒壊した家に塞がれていましたので、随分時間を費やしました。そこで、途中から寮にあったリヤカーでけが人を運ぶようにしました。このリヤカーはかなり重宝しました。震災から数日たって救援物資が役所に山積みされていると聞きましたので、リヤカーを引っ張って東灘区役所まで食料をもらいにもいきました。



3月末まで寮を避難所として開放し、被災された方たちのお世話をさせていただきましたが、我々はそれこそ何でもやったように思います。救援物資の配給から、仮設トイレの取り寄せ、避難している方に電話を使ってもらうため10円玉をかき集めて両替するなど、被災者のために何かできることはとみんなで考え、行動しました。

結果的に寮生が連携して100人以上救出することができ、高い評価をいただきましたが、我々としてはごく当たり前の行動をとったにすぎません。商船大生だから特別にできたとは思いません。普段お世話になっている近所の人たちが生き埋めになっている、みんなで力を合わせてなんとかして助けよう。そんな思いに動かされての行動でした。

被災者の自立を本当に支援できるボランティア活動を



京都大学法学部学生
上田 敏晴

神戸で地震があった日、私はナイロビでボランティア活動をしており、急ぎ神戸に入ったのは10日後の1月27日でした。大学を1年間休学して、これまでも雲仙普賢岳や奥尻島をはじめ、海外にも出かけてボランティア活動に取り組んできました。そうまで私を駆り立てるのは、第1にボランティアが好きだということであり、また、活動を通じて私自身が社会勉強をさせていただいているという理由からです。

今回は主に神戸中央区役所で約4カ月間活動させていただき、避難所の運営をサポートすること

が主な活動内容でした。具体的には各避難所の要望を聞いて回ったり、避難所間の情報交換の場として避難所連絡会を開いたり、また、各種情報を6カ国語に翻訳したボランティア広報誌「中央かわら版」の発行、在宅老人のケアとして福祉事務所と連絡をとるなどの活動が主体でした。そのほかにも夜間パトロール、救援物資の管理、炊き出し、屋根のシート張りといったこともさせていただきました。避難所連絡会を開いたときには19カ所の避難所から参加していただき、一日も早く復興に向けて立ち上がろうと私のような者の意見にも耳を傾けていただき、とても感激しました。

神戸での活動や、これまでのボランティア活動を通じて言えることは、災害発生から10日間ほどは応急処置とでもいうべき力仕事ボランティア活動の中心になります。それを境に避難所は生活の場へと移行し、したがってボランティア活動も被災者の自立をサポートする形へと移行していきます。この端境期に、ちょっとした問題が生じがちです。

ある避難所に朝から酒びたりの男性がいました。お年寄りや子供たち、女性たちが一生懸命に水汲みをしているのに、その男性は酔っ払っているだけで少しも作業をしようとしませんし、ボランティアをつかまえて「水、汲んでこい」と命令するのです。話を聞くと、この震災で2人の大切な息子さんを失ったそうです。その悲しみをお酒で紛らわしているのです。皆が働いているのですから、その男性にも一緒に働いてほしいとは思いますが、しかし、その男性の深い悲しみを、第三者である私が本当に理解できるでしょうか。皆が働いているから、あなたも働いてほしいとは言えません。一日も早く気持ちを切り替え、自立に向かって立ち上がってもらいたいと願いながら、私は男性に代わって水汲みをしました。

行政は被災者を大枠でとらえ、全体枠での救済

を考えます。それに対しボランティアは、もっと小さな規模での個人対個人の関係で力になることができます。被災された方たちの声をじかに聞き、いかにして要望に応じていくか。そこにボランティア活動の本当の姿があるように思います。いま振り返ると、十分な仕事をしてこなかったような気がしています。もっといろいろできたのではないだろうか。反省することばかりです。しかし、神戸での活動を通じて得ることのできたものは計り知れず、貴重な体験をさせていただきました。一日も早く神戸の街が復興し、人々が笑顔を取り戻されることをお祈りしています。

震災、 あの日を 忘れない

そこに戦いがあった。

自然の破壊力に対して人間の力はあまりにも脆弱だった。ライフラインや交通網の寸断はあまりにも大きな痛手だった。しかし、混乱と絶望の渦巻くなか、持っている知恵を絞り出し、血と汗、そして、涙を流しながら、我が身を顧みず敢然と戦いを挑み続け、懸命の救助活動、消火活動に当たった人間達があった。巨大な自然の力と戦った彼らの活動体験。

神戸市東灘消防団	志井 一雄
神戸市兵庫消防団第5分団長	田中 一行
神戸市長田消防団第3分団副分団長	東 繁
神戸市長田消防団第7分団副分団長	辻井 武彦
神戸市北消防団長	吉田 孝一
神戸市北消防団	松本 安弘
尼崎市消防団	鍵田 朝子
西宮市消防団長	木嶋 巖
神戸市消防局東灘消防署	山下 直樹
神戸市消防局長田消防署	吉川 洋三
淡路広域消防事務組合洲本消防署	川 渕 千尋

国際都市ミナト神戸に激震

神戸市東灘消防団
志井 一雄

毎年1月15日恒例の神戸市消防出初式の祝辞のなかの「災害はいつ起こるか分からない、市民の生活と安全を守り……」といった力強い言葉が私の頭の中にまだ残っている。

ゴーという地鳴りとともに激しい縦揺れに襲われ、寝ていた身体が放り上げられた。時計や棚の物、電灯、テレビなどが落ちてきて、足の踏み場もなかった。

しばらくして、懐中電灯を頼りに表へ出る。西の南青木方面から火災が発生しており、連絡しようにも机が倒れていて、電話が本棚の下敷きになり使用できない。

車で東分団の車庫まで行くと、列車が踏切で脱線、通れない。第三小学校前まで来て、一瞬自分の目を疑った。いつも通っている道がない。家々が全壊し、道を塞いでいる。よく見ると、けがをしている老人が戸板に乗せられていた。私はすぐにその老人を車に乗せ、近くの市橋外科病院に運んだ。病院は、既にたくさんのけが人でいっぱいだった。

病院を後に、急いで自宅に戻り、のこぎりやバール等を持って災害現場へと駆け付けた。途中、ある家族の方から「玄関口におばあちゃんが倒れているので、助けてほしい」とのことで、家族とともに救出に当たるが、なかなか思うようにはいかない。

そこで、ちょうど東分団の団員3名が加わり、なんとか無事に救出した。ホッとする間もなく、その隣の家ではおじいちゃんが奥の間で下敷きに

なっているとのこと。よく見ると、2階が1階部分を押潰している。柱が倒れ、壁が落ちるなどして、救出作業はスムーズに進まなかったが、無事助け出した。その後、石田東分団長と合流。分団長によると、多くの住民が倒壊家屋の下敷きになっているとのこと。途中救出しながら、中野北公園に団員が集まる。団員たちはすぐさま、チェーンソーやロープ、ジャッキ、テコなどを用意する。私は団員3名と分団車庫へ向かうと、車庫は火の見櫓に当たり、倒壊寸前といった状態であった。シャッターを壊し、強引に車を外に出す。

やっとのことで、中野北公園へたどり着き、けが人を甲南病院へ搬送しようとするが、車が多くて思うようには走れない。

一方、大宅団員の第一家5人が瓦礫の下敷きになっているとのこと。急いで、団員たちは現場へ向かい、柱や床板を取り除きながら、救出活動に当たるが、返事がない。やっとのことで、子どもの足が見えた。しかし、冷たい。「大宅、すまんが、助かる見込みがない。諦めてくれ。こんなことを言うのは、私もつらいが他の生き埋め現場に向かう」と、涙をぐっと堪え、それぞれの現場に団員を向かわせた。

救出後、けが人を甲南病院へと運ぶ。慌ただしく時間が過ぎ、気がつくと既に日が暮れていた。そういえば、朝から何も食べていない。中野北公園に戻った後、近くの稲荷神社で食事をとる。夜は停電のため電灯がつかないので、活動しにくくなる。それでも、火災のないようにと、団員たちは地区ごとにパトロールに向かった。

翌18日からは、連絡事務所を稲荷神社に移す。そして8時には、昨日の一家5人が生き埋めになっている現場へ遺体を収容しに向かう。全員で遺体の掘り出しにかかり、無事収容。トラックで、遺体安置所に運ぶ。

落ち着く間もなく、中町2丁目の男性から「私

の家内が1階の居間で下敷きになっている。声を掛けても、返事がない」との連絡が入り、団員が現場へと向かった。現場に着くと、1階は完全に押し潰され、声を掛けても全く返事がない。周りは暗く、救出作業は難しい。家族の方には気の毒だが、「明日の朝一番に来ます」との旨を伝えて、いったん引き揚げた。稲荷神社で遅めの夕食をとっていると、中町2丁目付近で火災が発生したとの緊急連絡が入る。

「中町2丁目といえば、午後6時ごろまで行動していた場所、残念だ」との思いを胸に現場へ急行。現場では第三小学校プールから送水しており、延焼防止に奮闘中。途中、要玄寺川の流れをせき止め、もう1本ホースを延ばす。次第に水圧が低くなり、プールの水が底を尽きはじめた。人見彰東灘消防係長とともに、水のある場所を調べに行く。本山南町スイミングスクールに向かうが、閉まっている。また、サティの防火水槽は距離が長すぎる。思案に暮れていたとき、神戸薬科大学に池があったことを思い出す。急遽、薬科大学に車を走らせる。池には豊富に水があり、事務局の方をお願いした後、応援の消防隊を要請する。団員は次々とホースを延ばし、長い下り坂、山手幹線、JR高架下を通るなど、やっとのことで放水を開始した。ホースの数、延べ45本。長期戦の結果、翌19日の明け方3時に鎮火。

そして、20日に再び、昨日の火災現場に向かったところ、残り火が隣の家へと迫っていたのである。すぐに消火し、二重の災難をなんとか防いだ。ホッとする間もなく、森南町に場所を移す。倒れた家の前には、既に遺体が運び出されていた。遺体をトラックで、神戸商船大学まで運ぶが時間がかかる。運び終えるときには、もう日が暮れていた。神社で夕食をとり、各地区ごとに警戒に当たる。このように、団員とともに副団長として災害現場で活躍できたのも、毎日、高井団長自らが自

転車やバイクにまたがり、巡視や激励、伝達などを欠かさなかったお陰だと、感謝しております。

最後に、東灘消防団員やそのご家族等で亡くなられた方に対し、ご冥福を祈るとともに、ご自宅が全壊、半壊したにもかかわらず、災害活動に全力を尽くしていただいた方に対し、厚く御礼申し上げます。また、全国の消防職員や団員に対しても、ご協力・ご活躍いただき厚く御礼申し上げます。

地震が起きて

神戸市兵庫消防団第5分団長
田中 一行

「ドン、ドン」地の底からの地鳴り、「ユラ ユラ」と左右の激しい震動が早朝の眠りを覚まさせた。この一瞬の出来事が後に多くの被害を生む大震災だとは、そのとき思いもしなかった。

私は、地震発生後、すぐに枕元の受令機のスイッチを入れ出動準備にかかった。時間がたつにつれ、局と署のやりとりから市内各所でただならぬ事態が起きているのが察せられた。

まずは我が管内の状況を掌握するため、パトロールに出動することにし、副分団長と連絡を取り出発した。しかし、外はまだ薄暗くあまりよく見えなかったが、それでも日頃目にしていない光景とは全く違っていた。

大きな道路はまるで鉛細工のように上下左右に波を打ち、古い木造家屋がところどころで崩れ、最も安全性の高いといわれていた高層建物も、一部の所では途中階が陥没したり前後に傾いていた。海岸線では去年完成した防潮扉の基礎部が1m程度陥没し、海水が流れ込んでいた。

また、町の中で行き交う人達も何か緊迫感が漂

い、自分のことだけで精一杯と言わんばかりの形相であった。このため普段よく気心の知れた人でも、何か違和感を覚えた。それでも、私達を見つけると「消防さん、何してまんねん。この先のアパートで人が埋まって皆で掘り起こしてまんねん。早よ来て手伝って」と叫びながら近寄ってきた。またある老人は「私は昭和13年の神戸の水害に見舞われ、今度は地震でこのざまや、いったいどないしたらええんや」などと嘆き、通り過ぎていった。その最中嬉しかったのは、「消防さんご苦労さん。何か用があったら手伝いまっせ」とよく声を掛けていただいたことだ。このときほど住民の方々から信頼されていることを実感したことはない。そして、団員としての任務の重要性を痛感したが、このような広範囲の被害状況下は、限られた分団員ではどこから何を手をつけたらよいか判断に迷った。しかし、そうも言うておれず、まずは人命救助を第一に行うこととし、その作業に当たらせだが訓練と違いいろいろな障害や重量物も多く作業は順調に進まなかった。それにもかかわらず、皆は黙々と一生懸命頑張り、気がつくとも日暮れを迎えていた。作業はいったん18時までで打ち切った。

今回の住民救出時に特に役立った道具は2つある。1つは自動車に備えつけているジャッキで倒壊家屋の梁やブロックの塀等の重量物を持ち上げたり、救出空間を作るのに少ない人員でも十分な力を発揮した。もう1つは家庭用の物干し竿で、足場の悪い所や高低差の激しい所から老人や子供を救出するとき、両端を団員や住民にしっかりと持たせ、これに寄り掛かるように指示し、道路上に誘導した。当初ロープを使ってみたが、不安定でかえって救助者はしり込みし動かなかった。今日の救出作業で、12人の方々を助け出したが、そのうちの半分の6人の方がその後亡くなったそう。皆があれほど精一杯頑張ったのに残念で虚し

い思いがした。

路上や空き地のあちらこちらで廃材等を燃やした後始末が、地震で断水していたため消火されておらず、これが元で火事にでもなると、心配であったため、夜は22時から、飛び火と残火警戒に当たりながら避難所を回った。時には知り合いの人の安否を尋ねられ、無事だと分かったと、周りの人たちも他人事ではないように喜んだ。

その姿を見て、だいぶ落ち着きを取り戻してきた様子が伺えたので、わずかばかり安堵した。

このたびの災害で、つくづく感じたことは、災害現場での補助活動も重要だが、消防団は消防署と住民から信頼されておく必要があるということである。

消防職員のような消火や救急活動はできなかったが、消防署と住民とのパイプ役として住民から信頼され愛される消防団になることこそ、大切ではないかと考えた。

長いながーい1日

神戸市長田消防団第3分団副分団長
東 繁

小生昭和15年生まれの双子座、血液型A型、職業はNC旋盤を使用する機械金属加工業を自営。バブル経済崩壊以来の不況にて少々バテ気味の中年男である。消防団歴20数年にして副分団長を拝命。年に数回の研修が最近身にこたえ始めた今日このごろだ。

平成7年の新年を迎えるも少々憂うつ気味にて気分一新のため家族を伴いカニスギを食しに香住にて1泊し帰神。

翌朝未明、激しい縦揺れ、「あっ！地震だ！」すぐにとび起き自室の戸を開け階下に通じる戸を開

け始める。続いて激しい横揺れだ。立っておれない。思わず柱につかまる。横の書棚が倒れガラスが割れる。ベランダに通じるガラス戸が倒れ、ガラスが割れる。隣室の台所の食器が崩れる音、これは大きい。「あっ！」目の壁がくずれ落ち、星明かりが差し込む。それをさえぎり瓦が落ちる。「もうだめだ。俺と家族はこのまま家とともに崩れ落ちるだろう……」一瞬脳裏をかすめる不吉な予感。どれくらいの時間がたったであろう。やっと揺れが止まった。家族一人ひとりに声をかける。廊下が傾き階段が落ちている。「足もとに気をつけろ！」「声を出せ！」「お父さん助けて！」女房の声だ。隣に寝ていたのに気づくのが遅れ、タンスの下敷きになっている。暗闇のなか手さぐりで引き出す。やっと全員そろった。懐中電灯を探さない。何かの下敷きになっている。やむを得ん。あちこち崩れた壁の間から差し込む星明かりを頼りに靴下と上着を探す。「2枚でも3枚でも身につけるだけつけろ！」次は脱出だ。残念階段が落ちている。

避難はしごがない。屋根伝いは無理だ。初老の母がいる。しばらく静寂が続く。「オーイだいじょうぶか」分団長の声だ。「助ケテクレ！ 全員無事ダ」「はしごを用意してくれ」「窓を破れ！」足もとに落ちた置物を手に、壊れたタンスを足場に窓を破る。「オー！」近所の人たちだ。はしごが来る。家族をそのまま家の中に残す。「落ち着け、もうすぐ明るくなる。それまで着る物を身につけがをしないよう靴下を厚めにはいておけ」自分のみ脱出。「消防団員はすぐ集まれ！」、間髪を入れず助けを求める声。靴とヘルメットを取り出しに崩れた階下にもぐり込む。表に出たとたん次から次へ救助を求める声。家族よ許せ！

現場が増すばかりで人手が足りない。通りがかりの人に声をかけ応援を求め、分団員1人以上を付けて現場へ向かわせる。「道具が欲しい！」のこ

ぎりだ。ボールだ。ジャッキだ。現場を走り回り道具を渡し二次災害のないよう注意を促す。声をかけ反応のある現場を優先する。やっと1人目を救出。履物がない、近所のスリッパを借用。次々と救出される人を福祉センターへ送る指示。そして次へ。息をつく間がない。「深入りに気をつけろ！」と分団長からの伝言。頭でわかっているもついのめり込んでしまう。1人でも多く助けねばと気持ちばかりが先行してしまう。

二次災害に気をつけねばと反省する。次から複数団員での行動が必要だ。担当地区内を巡回中、隣の兵庫区で生き埋めとの声。応援に駆け付けた甥を伴い現場へ急ぐ。退路を確保しながら前進せよと指示する。2階の屋根が胸の高さまで跡形もなく崩れている。瓦、トタン、柱、壁、手当たり次第左右に投げる。現場の一角に火の手が上る。

「だれか119番は」「連絡済み」との声。「急げ！」救出現場の風上だ。炎が近づく。次々と消火器が集まるが効果がない。3mも離れていない作業者の肩に火の粉が舞う。「熱い！ 熱い！ 助ケテクレ」胸に突きささる助けを求める声。風がうずまきだした。限界だ。「全員退避！」「退け！」「逃げてくれ！」しかし、だれも逃げようとしない。危ない。サイレンの音が近づく、消防車だ。助かった。が、消火栓が使えない。応援消防車の機関員を伴い地下水槽へ。やっと水が出る。しかし、通行車両にホースを破られる。機関員に減圧を依頼し近くに落ちていたタオルと自分のベルトでホースを作ろう。「よし！」増圧OK。近くにあった他の分団詰所にてハンドマイクとロープを借用、交通止めをする。が、制止の手を振り切り通り抜ける車両。身に危険を感じるも後へ引けない。やっと鎮火、応援の甥とともに詰所（分団詰所全壊のため分団長のガレージを詰所に設定）へ。もう15時30分過ぎか。やっと一服しながら尋ね人の応対に、次から次へ深夜まで続く。

外が暗くなり始めたころ、分団長指示により夜間パトロールを開始する。懐中電灯で映し出される光景は、この世のものではない。瓦礫と壊れた家の間でたき火で暖をとるグループが数カ所以上、火の元に気をつけるよう注意をしながらパトロールを続ける。が、途中から道がない。いや、壊れた家が続き道路や路地が寸断されパトロールもままならない。あちこちにまだ生き埋め者が相当数いるであろうが、この状況では手のつけようがない。明るくなるのを待とう。

夜明けと同時に町内の行方不明者の確認作業。並行して食料の確保だ。各分団員は自宅（全員が全壊）の中から食料になるものを持ち出し集める。薬は町内の薬局屋さんが無料にて提供してくれた。次は飲料水、近くに上水道の破損箇所があり漏水しているとの情報。分団員3名に容器を持たせ現場へ。

生き埋め現場へ再度近づくも我々では手のほどこしようもない。残念。そこへ消防車、救急車の進入、道路確保のためパワーショベルカーが入ってきた。分団長の手配だ。次から次へやったことのない業務、消防団員としてまたはボランティアとして避難所の飲料水、トイレ用の下水、救援物資の配布、取引先のトラックを借用、そして夜警と行方不明者の調査と生存者の確認。尋ね人の照合、そしてまたまた火災発生。

何日ぶりかであった家族の顔、残念だが声が出ない。身ぶり手ぶりでのど薬を頼む。家族の心配気な顔。

1月25日ごろから本業再開するも1日4時間仕事して消防団若しくはボランティア業務を10時間ほど、他の分団員も本職を再開しはじめ、夜警人数が減少する。定員半数割れにて夜警と避難所の雑用に追われる。

1週間も過ぎたであろうか機動隊員と自衛隊員が到着。行方不明者の探索を引き継ぎ、やっと一

息つく。分団員は疲労困憊だ。年長の分団員の顔色が黒ずんで見える。即1週間の団業務離脱を指示する。私自身昼夜にわたる団業務のためお風呂は2週間以上も縁がない。ましてや洗顔など水がもったいない。電灯は近所の土木業の方に自家発電を借用し詰所、避難所前広場を照明するが、近辺は暗闇、何とも不気味だ。深夜パトロールには自前の四駆車のサーチライトを点灯、ヘッドライトアップ、携帯電灯にて周辺を照明する。あわてて逃げる怪しげな人影「追うな！」残された現場の確認を優先する。

「火の気は大丈夫か？」火事場泥棒に神経を逆なでさせられるが、近隣住民の協力には頭が下がる。先ほどの土木業者の協力……、震災直後における道具類の無償貸出し、夜警の助っ人。そして、とどめは火災現場における重機（パワーショベル）を使用しての活躍。燃えさかる火災現場へ重機で突入し、火勢をショベルとキャタピラで崩し延焼を食い止めたのは最大の功績である。（この件に関しての後日談。重機オペレーターいわく「行け！行け！」のどなり声で突入したが、前後左右煙と粉じんに囲まれ生きた心地がしなかった。もう二度としたくはない」とのこと、当方は危険と感じ「避け！」とどなったはずなのに。後日ビールを飲みながらの笑い話だ。）

ともあれ、延焼を食い止めたのは住民パワーの賜だ。自慢じゃないが我が分団員もよく頑張った。気がつけば今日はもう3月19日、今日で夜間パトロールも打ち上げで分団員と協力者を集め慰労を實行し、震災以来のよもやま話に花が咲く。ご苦労様でした。本当にご苦労様でした。これで消防団員としての1月17日が終わった。長いながーい1日であった。明日からまた復興を目指してのながーい1日が始まる。頑張れ消防団！そして頑張ろう神戸。

尊い命を見守った懐中電灯

神戸市長田消防団第7分団副分団長
辻井 武彦

生まれ育った街、愛するこの街、人情の通う街、その長田の街が一瞬にして変わり果て、瓦礫の街と化してしまった。多数の尊い命を奪い、親愛なる友を失い、大切な財産を破壊した阪神大震災が、私は憎い！

思い返せば、今も背筋が寒くなるくらいの自然災害の恐ろしさをひしひしと感ずる。

魔の1月17日の朝、「ゴオー」と大地を揺るがすごい地鳴りと下から突き上げられる縦揺れ、続いて体が左右に転げるほどの激しい横揺れ……。私はこれは大きな地震だと直感し、すぐに横に寝ている女房の上に覆い被さったその瞬間、書棚は倒れ、私の背中にはダンスや棚の上の荷物が飛んで落ちてきた。幸い2人ともけがはなかったので、揺れがおさまるのを待ち寝床から起き上がれば電気は消え、周りは全然見えず、手探りで常時備え付けてある消防団出動時の懐中電灯(強力ライト)を取った。

照らして見ると仏壇やダンスは倒れガラスが散乱、足の踏み場もない状態のなか、女房にウインドブレーカーを着させヘルメットを付け、私も作業服を着て消防ヘルメットをかぶり避難路を捜した。2階からの脱出は無理と分かり、傾いた階段を降り倒壊した1階の部屋の戸を蹴破り、なんとか勝手口から外に脱出した。

外は真っ暗でなにも見えない。唯一持ち出した懐中電灯で照らして見ると、表の洋服店は崩壊し、1階が潰れ路地を塞いでいる状態、自分の目を疑うほどの有様である。裏の民家は幸いにして倒壊

していなかったが、瓦が落ちてきて危険な状態であった。そのなかすぐに隣の住人、路地の住人を叫び起こし安否を確認し、近くの真陽小学校へ避難するよう大声で呼び掛け誘導しながら、隣人と女房とを避難させた。近くに住む弟も駆け付けてきて、無事である妻が確認でき、弟とともに住人の避難誘導に当たった。

再び弟とともに自宅付近に戻り、残る地域の住民に大声で学校へ避難するよう誘導しながら、商店街に出るといたるところからガスの臭いが発生している。地震で外へ飛び出した人たちが、ライターで周りを照らしていたり、ほっと一服タバコを吸う人がおり、大変危険な状態であった。すぐ大声で「ガス漏れしている！ タバコを吸うな！ 火を消せ！」と怒鳴り知らせ、ガス管の破損部分に梱包テープを貼った。

それから久保町2丁目方面に向かったとき、住民から「娘が生き埋めになっている。だれか助けて！」と叫ぶ声が聞こえた。その現場へ行くと平屋の古い家が崩壊し、家の前で母親が気が狂わんばかりに娘の名前を呼び叫んでいた。窓から侵入を試みたが無理、入口の少しのすき間から近所の人と突入した。足元を掘り出して行くと、手を発見「ここに人がいる！」と叫び、埋もれている人の顔の土や瓦礫を取り除いた。既に息がなく大声で呼びかけても反応がない。消防団で訓練した心肺蘇生法を行い、口から空気を送り込んだが反応がない。数人で家の外へ搬出し、路地で心臓マッサージ、人工呼吸を繰り返したが回復しない。すぐに近所の人と娘を毛布に包み近くの病院へ搬送した。

後を家の人と近所の人達に頼み、娘の回復を祈りながら、自分の勤務先の会社のある庄田町に向かった。そのとき、私の消防団の服装を見た庄田町に住む田路さんが駆け寄り、「親父が家の中に閉じ込められている。助けてくれ！」と救助を求め

られ、現場に駆け付けて見ると古い公会堂が崩壊し、完全に潰れ落ちていた。

辛うじて残った屋根のすき間から中へ大声で「大丈夫か！」と問いかけると男の人の声で応答があった。「よし！ 生きています」と屋根に登り棟の外れている少しのすき間から近所の人と突入した。幸い男の人は部屋のすき間で動ける状態であり木材や瓦礫を取り除き男の人を助け出し、後を近所の人たちに頼み、他の倒壊した場所に向いた。すると近所の人から「消防団の辻井さん、二葉町1丁目の民家で女の人が生き埋めになっている、助けて！」と知らせがあり、その他の町でも生き埋めの人があると通報があり、私の弟と手分けして救出に向かった。

現場では、二葉町2丁目の自治会の友人役員とともに倒壊した家の中に突入した。大きな家の棟木と倒れてきた冷蔵庫とで挟まれ、婦人が布団の中で埋まっていた。幸い腰から下が挟まった状態で意識も呼吸も正常であり、自治会の役員とともに余震に怯えながら工事現場の鉄パイプや角棒で持ち上げようとするが動かない。近所の人からのこぎりを持ってきて救助活動をしてくれたので、何とか婦人を助け出すことができた。この現場で救助作業していると「庄田町1丁目、庄田橋の近くの民家で女の人が生き埋めになっている」との通報があり、自分は消防団員である、なんとかせねばと自分の責務の重さを痛感する。しかし、他の分団員も各自地区の救出作業に当たっており、どうにも人手が足りない戸惑っていたが、大声で「若い衆数人集まってください！ 庄田橋の近くで女性が埋まっている。助けにいくので手を貸してくれ！」と叫んだところ、若い人たちが4～5人集まってくれた。そのとき私は消防団の服、ヘルメットに対し住民からの信頼を強く感じたとともに住民の協力をありがたく感じた。

庄田橋の現場に着き、現状を見渡したところ3

軒が崩壊し、そのなかの1軒に女性が生き埋めになっていた。一緒に駆けつけてくれた鳶職の山下君、近所の青森君、鎌田君とともに若い人たちが一致団結して瓦礫木材を取り除き、中にいる婦人の姿を発見した。現場は家の棟木や梁が落ちて腹部あたりに覆い被さり身動きできない状態であったが、意識もあり、呼吸も正常であり、すぐに近くの人に車のジャッキを借りて狭いすき間に入れ、腹部に当たっている材木を持ち上げた。しかし、足が他の材木ではさまり救助することが困難な状態。若い人たちも鉄パイプや角材で持ち上げようとするがビクともしない。チェーンソーや丸鋸がないと抜くことができない。消防レスキュー隊の要請が必要と考え、自治会長に消防署まで走ってもらった。

しかし、消防隊全員他の場所に出動しており、すぐに来てもらえない状況、生き埋めの婦人には「今レスキュー隊を呼んでいるから頑張るんやで！」と元気づけようと声を大きくした。

日が暮れてしまい真っ暗な闇の世界となってきたなか、なんとかこの婦人を救助せねばと気が焦るが、道具がない。人間の力ではどうすることもできない。自問自答の声が頭の中を走る。「この人を、このまま見すごすのか？ 助けられないのか？ 今ある道具、方法では無理だ！」と何度も頭の中で自分の声が飛びかう。そこで、少しでも婦人に勇気を持ってもらうよう、私は再度崩壊の家の中に入り、すき間をはって婦人の所に行った。「奥さん、この懐中電灯（消防団の強力ライト）を持ってレスキュー隊が来るのを待っていてくださいよ。必ず助けに来るから頑張るんやで！」と勇気づけて家から出てきた。そのとき、私は人の命の尊さを感じた。「婦人に預けた懐中電灯の灯が消えるとき、人の命の灯も消えてしまうのではないか？」と不安が頭をよぎった。そして家から出たとき、婦人のいる方向に私は手を合わせ「お許

してください。消防団員として貴女を助け出すことができず。人間1人だけの力ではどうにも……」と無事救助されることを祈り、長田消防署大橋出張所に救助を求めに走った。

ちょうどそのとき、消防団係の太田署員に会い、詳しい事情を説明し救助に向かってもらうよう要請した。

それからは、大橋・若松地区の火災現場にて現場警戒に当たり、大正筋商店街、㊦市場の火災現場での消火活動に従事した。幸い私の住む本町筋商店街は、火災の難から免れることができたので、火災から町を守るため丸五市場の菅さんと弟とともに不眠不休の警戒を続けた。

他の団員も自分の地域にて飛火の警戒、火災の警戒を実施、分団長も駆け付けていただき激励の言葉をかけてくださった。丸五市場の菅さん宅の井戸水を防火用水として提供していただき、初期消火の体制をとり、地域住民も一致協力していただき防火用水の準備を行ってくれた。大橋、若松町の火災は夜空を真っ赤にするくらい火勢は増大するばかり、ビルの窓からは炎の舌が次から次へと移っていった。手の付けようのない状態で、飛び火が南の地域に来ないように、ただ、念ずるだけであった。2日目の夜、真陽小学校の避難所の南側（二葉町1丁目）の倒壊の民家から火災発生、一時避難所の学校ではパニックになりつつあった。その火災現場へ地元の住民が一致協力バケツリレーで、学校の池の水や、市場の井戸水（菅さん宅の水）を放水し、延焼防止に必死に戦った。「真陽学校を守れ！ 火災を食い止めるのだ！」と叫び、住民の連携プレーで水をかけ、消火器で消火活動に当たった。消防隊が駆け付け、私はホースの布設支援に当たり、放水態勢をとった。手の甲はホースと家の壁でこすり負傷しながらも民家の火災を大きくすることなくてすんだときは大変嬉しく思い、また、住民の協力があったので大火に至ら

なかったと感謝した。

3日目からは、地元住民の自警団と合同で地域パトロールを実施し、余震の続くなか、火災警戒、窃盗防犯警戒実施に当たった。それから何日か過ぎ、真陽学校の消防団仮詰所に1枚の手紙と私の預けた懐中電灯が届けられたのです。

その手紙には「1月17日23時58分覚知。長田区庄田町1丁目の救出現場で消防団の方から借用したライトです。お返し願います。寝屋川消防救助隊」と書かれており、庄田町で生き埋めになった婦人に渡した懐中電灯が私の手元に戻ってきたのです。無事救出されたとのことで、自分の家族が助かったような気持ちでその瞬間「どーっ」と涙があふれ出てきました。名前も知らない婦人であったが、自分たちが救出作業し勇気づけた人が助けられたことに対し、ますます喜びを感じ、また人の命の尊さを新たに感じ、さらにその婦人の尊い命を見守ってくれた懐中電灯に心より「ありがとう。ご苦労様」と言ってあげました。私も長田消防団第7分団の副分団長という重責を受け、その使命を果たすことができた喜びと、人の尊い命を救うことができた喜びとで私自身一生忘れることのできない経験でした。

消防団員の誇り

神戸市北消防団長
吉田 孝一

消防団の必死の活動

市内各地の消防団も常備消防機関に劣らず後世に残る活動を実施した。

自宅は全壊・全焼し、家族を避難させたまま連日の活動を続け、疲労により殉職された団員さんもおおり、被災者である全団員が郷土愛護のため、

必死の活動を行った。

大規模火災が各地区で発生し、消火活動を主体とした報道は多いが、団員の活動は、救助・消火・人命検索・避難所への誘導・救援物資の搬送及びパトロールなど広範囲にわたり、団員の救助した人数だけでも958人に達する。

皮肉にも今回の震災に対する活動が、地域住民からの信頼と消防団の存在価値をより一層高める結果になってしまったことは事実であろう。

私の所属する北消防団の管轄区域は、神戸市の六甲山系の北部に位置するため、このたびの震災では、比較的被害の少ない地域であった。

北消防団は、8個支団・67個分団(班)・団員数1,370名で、小型動力ポンプ等装備する積載車を有するため、連日区域を越えた活動を行った。

私の支団の管轄区域である有馬温泉街でも家屋倒壊による生き埋め事故が発生し、救出活動の実施と区域内の警戒等に全団員が出動した。

このため1月17日の市街地への災害には出動することはできなかったが、現場出動した各支団長は、「六甲山系を越えて帰還する団員の表情には、充実感に満ちた思いで疲労の色は、全く感じとれなかった」と口々に話している。

地震発生3日目にし動した東灘区の火災現場では、現場で会った常備隊員の表情を見た途端、思わず胸の底からこみあげるものを押さえきれず、指揮並びに現場活動一切を消防団にまかせてもらい、ポンプ車の中で仮眠していただいた。

また、災害現場の活動が主流と思われがちな震災で、裏方役として現場活動隊の後方支援や被災者への救援に頑張った婦人消防隊の活動も忘れることはできない。

地震発生直後から毎日欠かすことなく続けられた炊き出しは、現場活動隊を勇気づけ、さらに被災者を元気づけ喜ばれた。

信頼された消防団

町が都市化するほどに消防団の存在価値が薄れる傾向にあると思われる。

消防団の基調とする“自らの郷土は自ら護る”という郷土愛護の精神が、高層化するビル群とそのなかで生活を支えることで精一杯の人間心理に反比例するように薄れていくのは、決して誰の責任でもなく社会情勢の流れといえるかもしれない。

しかし、人は予想だにしない想像を絶する災害に直面したとき、1人では生きていけないことを知り、周りの人たちの思いやりを感じる。

このたびの献身的な団員の活動を、福沢諭吉の言葉を借りるなら「世の中で一番価値のある人は、私利私欲のためでなく他人のためにできる人……」代価を求めることのない平素の活動もそうであるが、団員とともに行動した市民は、消防団の素晴らしさと、その重要性を理解していただいたことに違いない。

震災では、市内全域で発生した大災害のため、常備消防機関の出動できない現場は無数あり、その現場のいたるところで消防団員がリーダーとなり、地域住民の協力を得ながら多くの人命を救出し、消火活動を行った。

市民の防災活動の記録をみると、その多くが消防団員に対する感謝と信頼の言葉で終結されている。

常備消防力をたとえ倍増したとしても対応しきれないものではない大震災に、消防団の存在価値が再認識され、施策が検討されることになった。

すでに神戸市では、消防団の充実を含めて「神戸市消防基本計画」策定のための、検討段階に入っているため、人員の増強や資機材等の整備等具体的な提言については、控えさせていただくことにするが、「もっと有効な人員・資機材があれば、もっと多くの人を救出でき、もう少し火災を小さくおさえることができたのでは……」と思うのは

それこそ「後の祭り」なのかもしれないが、被災された市民に報いるためにも、今回の貴重な教訓を無にせず、安心して暮していける町づくりのために、鋭意努力する決意であります。

1月17日、それからの活動

神戸市北消防団
松本 安弘

寝ていると、ベットが飛び跳ね振り落とされて、目が覚めた。大きく揺れるなかで、「家が潰れてしまう」と思い、長い揺れがおさまったあとに「みんな、大丈夫か」と、安否を確認した。

停電しているので、懐中電灯を探すがなかなか見当たらない。車の中に消防団用の懐中電灯が置いてあるのを思い出し、外に出てみると、いつも見慣れている景色が暗闇の中でかすかに浮かび上がっていた。目の前は暗く、遠くの方で車の明かりだけが目立ち、「停電すれば、こんなに暗くなるのだなあ」と、今考えてみるとずいぶん呑気なことを思っていたものだ。しかし、その時には周囲のことにしか注意がいかず、神戸の市街地のほとんどが壊滅的な被害を受けていようとは思ってもよらなかったのである。

急いで、車の中から懐中電灯を取り出し、ラジオを聞いてみると「……地震のため、阪神高速道路は通行止めです」との、緊迫したアナウンサーの声が流れてきた。

「これは大変なことが起こっているにちがいない。一度、パトロールに出掛けなくては……」と、家族を残して車で淡河周辺をパトロールした。この時点でも、まだ大災害が起こっていたと感ずることはできなかった。

その後、支団長に連絡すると「今のところ、出

動要請はないが、きっと要請があるだろうから、それまで待機してほしい」と言われた。しかし、職場の方が気になり、連絡先を言い残してから急いで職場へ向かい、建物の被害調査や職員の安否の確認などに走り回った。

時間が経つにつれ、電気がつき、テレビなどで被害の大きさが伝わるたびに「なぜ、出動要請がないのか」と、イライラしてきた。そんなとき、支団長から突然「19時に出動する」との連絡が入り、気持ちを引き締めて、集合場所の淡河消防出張所へ駆け付けた。

9つある各分団も次から次へと、消防自動車が集結してきた。そうしたなか、消防署の指示で私を含む3分団16名は、最も被害の大きい長田区の火災現場へと向かった。途中、目に映る大火災の光景に「これはひどい」と、呟いたものの、これからの活動の大変さを感じ、だれもが無言になった。

まもなく、長田消防署に到着、3階の指揮本部へと向かうが、署内は薄暗く、あちらこちらに物が散乱しており、まるでゴミ箱をひっくり返したような状態で、被害の大きさを改めて肌で感じた。指揮本部では、投光器で机上の地図を照らしており、応援に駆け付けた他都市の消防本部と協力して、長田港からホース延長をするよう指示を受けた。さっそく、現場へ向かおうと国道2号線を西進するが、大渋滞に巻き込まれ、やっとの思いで大橋5丁目付近にたどり着いた。

現場では、あまりの火の勢いに一瞬後退りしそうな気持ちになった。不安な気持ちをおさえ、慎重にホースを延ばし、とにかく放水を始めた。

途中、他の団員と交替しながら、翌朝の5時まで頑張った結果、火勢は弱くなり、後は応援に駆け付けた消防署員に任せ、現場を離れた。こうして、私の1月17日は終わったのである。

震災から3カ月が過ぎて、あのときのことを振